２０１３年度　修士論文

Ｊリーグ選手を最終的にイングランドプレミアリーグにステップアップさせるための最初の海外移籍に関する研究

Research on First International Transfer For J-League Players to Ultimately Play in English Premier League.

早稲田大学 大学院スポーツ科学研究科

スポーツ科学専攻　トップスポーツマネジメントコース

５０１３Ａ３１４－３

栗山　　貴行

Takayuki Kuriyama

研究指導教員：　平田　竹男　教授

目次

第１章　序論 1

第１節　研究背景 1

第１項　サッカー日本代表の国際大会での躍進 1

第２項　サッカー選手の移籍の活発化と海外で活躍する日本人選手の増加 2

第３項　移籍に関するルール 6

第４項　移籍における代理人の役割 9

第５項　問題意識 10

第２節　先行研究 11

第３節　研究目的 11

第２章　研究手法 12

第１節　【研究１】欧州サッカーリーグのレベルに関する調査 12

第１項　FIFA ワールドカップ及び UEFA 欧州選手権の出場選手の所属リーグに関する調査 12

第２項　UEFA リーグランキングの推移 12

第３項　UEFA チャンピオンズリーグにおける各リーグの成績調査 13

第２節　移籍ルートに関する文献調査 14

第１項　日本から当該リーグへの移籍の実績 14

第２項　他の欧州リーグから、当該リーグへの移籍実例調査 14

第３項　各リーグの移籍金収支調査 15

第３章　研究結果 16

第１節　欧州サッカーリーグのレベルに関する調査 16

第１項　FIFA ワールドカップ及び UEFA 欧州選手権出場国の登録選手の所属リーグに関する調査 16

第２項　UEFA リーグランキングの推移 37

第３項　UEFA チャンピオンズリーグにおける各リーグ所属チームの成績 41

第４項　まとめ 45

第２節　【研究２】移籍ルートに関する文献調査 46

第１項　日本からプレミアリーグへの移籍の実績 46

第２項　他の欧州リーグから、当該リーグへの移籍実例調査 53

第３項　プレミアリーグへ移籍した欧州以外の選手の移籍直前の所属リーグ ... 55

第４項　各リーグの移籍金収支 59
第４章　考察 60
第１節　Ｊリーグからプレミアリーグへの直接の移籍 60
第２節　他の欧州リーグ経由のプレミアリーグ移籍.....60
第３節　オランダ移籍が日本サッカー界にもたらす利益.....63
第４節　発展の可能性.....65
第５節　今後の課題.....65
第５章　結論 67
第６章　謝辞 68
参考文献 69

図表目次

表 1　欧州リーグ移籍期間 3
表 2　1998 年以前の日本選手の海外移籍 4
表 3　欧州リーグ外国人枠 8
表 4　歴代移籍金上位 5 選手 10
表 5　ワールドカップ 2002 出場国 16
表 6　ワールドカップ 2002 出場国登録選手所属リーグ 16
表 7　ワールドカップ 2002 ベスト 16 進出国登録選手所属リーグ 19
表 8　ワールドカップ 2006 出場国 21
表 9　ワールドカップ 2006 出場国登録選手所属リーグ 21
表 10　ワールドカップ 2006　ベスト 16 進出国登録選手所属リーグ 24
表 11　ワールドカップ 2010 出場国 25
表 12　ワールドカップ 2010 出場国登録選手所属リーグ 27
表 13　ワールドカップ 2010 ベスト 16 進出国登録選手所属リーグ 29
表 14　ワールドカップ出場国登録選手所属リーグ別人数の推移 31
表 15　欧州選手権 2004 出場国 32
表 16　欧州選手権 2008 出場国 34
表 17　欧州選手権 2012 出場国 35
表 18　UEFA リーグランキング　シーズン別ポイント 37
表 19　UEFA リーグランキング推移 38
表 20　UEFA チャンピオンズリーグ　ベスト 4 以上チーム 41
表 21　UEFA チャンピオンズリーグ　リーグ別ベスト 16 以上進出チーム数 42
表 22　UEFA CL 成績ポイントランキング 44
表 23　日本人選手　プレミアリーグ移籍時平均年齢 51
表 24　プレミアリーグ移籍選手　移籍前所属リーグ 53
表 25　プレミアリーグ移籍選手　移籍前所属リーグ（欧州以外国籍選手） 55
表 26　欧州各リーグからプレミアリーグへの移籍選手に占める欧州以外国籍選手 57
表 27　プレミアリーグ移籍時平均年齢 58
表 28　プレミアリーグ移籍前平均在籍年数 58

表 29　移籍金収支（2003-2004 シーズンから 2012-2013 シーズン）....59

図 1　日本の FIFA ランキングの変遷.....2
図 2　欧州リーグ所属日本人選手数（2014 年 1 月 7 日現在）.....5
図 3　日本代表　海外リーグ所属選手数.....6
図 4　ワールドカップ 2002　出場国登録選手所属リーグ.....18
図 5　ワールドカップ 2002 出場国登録選手所属リーグ（ベスト 16 進出国）
.....20
図 6　ワールドカップ 2006　出場国登録選手所属リーグ.....23
図 7　ワールドカップ 2006　出場国登録選手所属リーグ（ベスト 16 進出国）.....25
図 8　ワールドカップ 2010 出場国　登録選手所属リーグ.....28
図 9　ワールドカップ 2010　出場国登録選手所属リーグ（ベスト 16 進出国）.....30
図 10　各国リーグ別ワールドカップ出場選手所属数の推移.....31
図 11 欧州選手縁 2004　出場国登録選手所属リーグ.....33
図 12　欧州選手権 2008 出場国登録選手所属リーグ.....34
図 13　欧州選手権 2012 出場国登録選手所属リーグ.....36
図 14　UEFA リーグランキング推移.....39
図 15　UEFA CL　出場チーム所属リーグ別成績.....43
図 16　日本人選手のプレミアリーグ移籍形態.....50
図 17　日本人選手　プレミアリーグ加入前所属リーグ.....51
図 18　プレミアリーグ移籍選手　移籍前所属リーグ.....54
図 19　プレミアリーグ移籍選手　移籍前所属リーグ（欧州以外国籍選手）
.....56

第１章 序論

第１節　研究背景

第 1 項　サッカー日本代表の国際大会での躍進

サッカーのナショナルチームによる最高峰の大会は、周知のとおり FIFA ワールドカップであるが、サッカーの男子日本代表（以下、単に「日本代表」と表する。）は、1998 年に開催されたフランス大会において、初めて、FIFA ワールドカップ本大会への出場を果たした。以後、2014 年に開催されるブラジル大会まで、5 大会連続で、アジア代表としての出場権を獲得している。

1998 年以前の日本代表は、アジア地区の予選を勝ち抜くことにも苦戦をしていたものであるが、FIFA ワールドカップ本大会への出場を果たして以降は、アジアにおいても、継続して、トップの地位を維持している。すなわち、1998 年以降、アジアにおける代表チームの大陸別選手権であるアジアカップにおいて、日本代表は、4 大会中 3 回で優勝（2000 年レバノン大会、2004 年中国大会、2011 年カタール大会）を果たしており、優勝を逃した 1 大会（2007 年インドネシア等共催大会）でも 4 位という成績を残している。アジアカップにおける優勝回数は、1992 年日本大会を加えた 4 回を誇る日本が最多である。FIFA ランキングも、2013 年 12 月末時点の順位こそ、アジアカップ予選を連勝したイランに遅れを取り（日本は、前回大会優勝のため予選免除）、アジア 2 位となったが、それ以前は、日本が、アジア最高位を維持していた。このように、日本は、アジアでは最上位の力量を誇るまでに実力を高めている。

また、FIFA ワールドカップ本大会においても、初出場であった 1998 年フランス大会は、3 戦全敗の最下位に甘んじた。自国開催であった 2002 年日韓共催大会では、2 勝 1 分でグループリーグを突破してベスト 16 に進出したが、2006 年ドイツ大会では、0 勝 2 敗 1 分と、勝利を挙げることができず、グループリーグ敗退に終わった。しかし、2010 年南アフリカ大会では、6 月 14 日に開催されたカメルーン戦で、他国開催の FIFA ワールドカップ本大会での初勝利を挙げた勢いそのままに、2 勝 1 敗でグループリーグを突破し、ベスト 16 の戦いでも PK 戦までもつれる互角の戦いを繰り広げての惜敗という実績を残した。

さらに、23 歳以下の選手で構成されるオリンピックにおいても、2012 年ロンドンオリンピックにおいて、惜しくもメダルを逃す 4 位という成績を残した。

これに呼応するように、日本の FIFA ランキングも、年々上昇傾向にある。なお、日本の FIFA ランキングは、2006 年 1 月には 15 位となっているが、翌

2007 年には、46 位と大幅にダウンしている。これは、2006 年 7 月に FIFA ランキングの基礎となるポイントの算定方法が変更となったことによる影響を受けたものである。新方式となった 2007 年以降を見ると、年々ランクが上昇する傾向にあることに代わりはない。

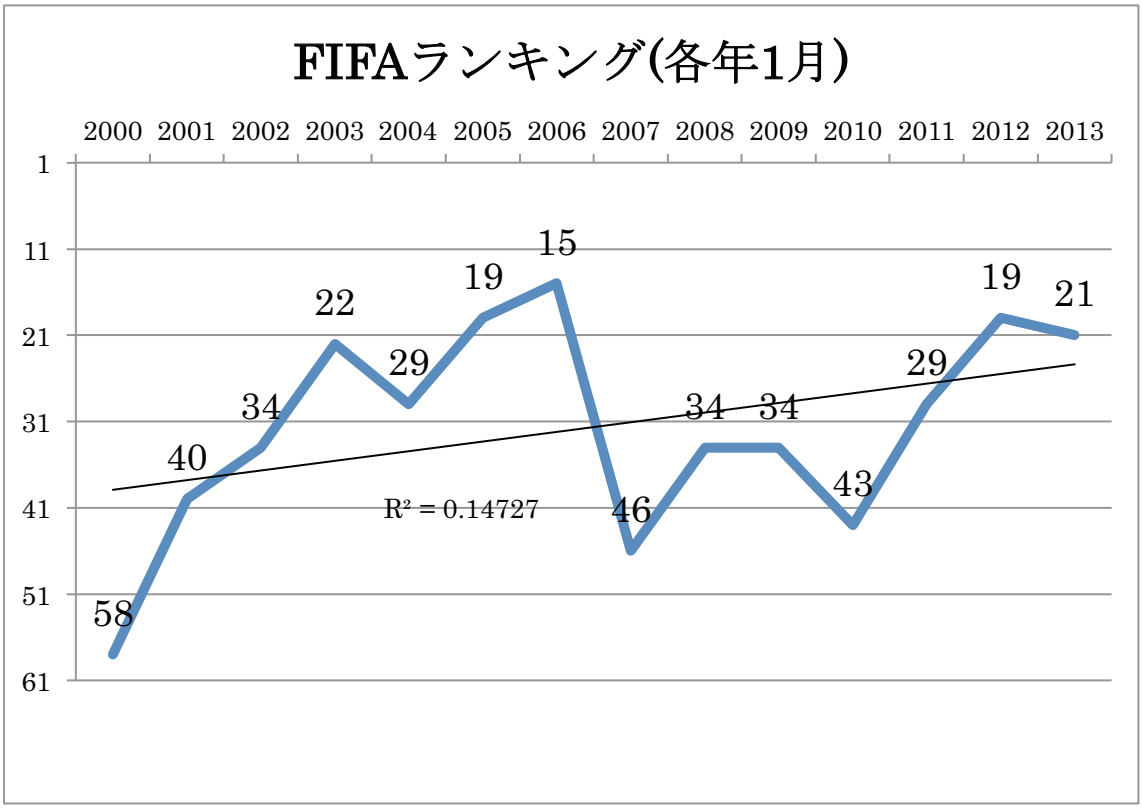

図 1　日本の FIFA ランキングの変遷

fifaranking.net より筆者作成

このように、日本代表は、近年、国際大会での実績を築き上げられるようになっている上、その他の国際 A マッチにおいても、欧州や南米の強豪国を破る試合が増加傾向にあり、大きく躍進している状況にある。

第 2 **項　サッカー選手の移籍の活発化と海外で活躍する日本人選手の増加**

1）サッカー選手の移籍の活発化

欧州において、前シーズン終了から新シーズンが開始されるまでの夏の期間

と、欧州のリーグではシーズンの中盤にあたる 1 月の 2 回、多数のサッカー選手が他のチームに移籍し、毎年、世界的に有名な選手の移籍成立のみならず、移籍の噂までもがニュースや新聞紙面を賑わせており、サッカー選手の移籍が非常に活発に行われている。

表 1　欧州リーグ移籍期間

Pre-season window	Mid-season window	Associations
1 July -31 August	1 January – 2 February	France, Germany, Italy, Spain
9 June – 31 August	1 – 31 January	England
11 June – 2 September	3 – 31 January	Netherlands

この活発な移籍の発端となったのが、1995 年 12 月に、欧州司法裁判所により下された、いわゆる「ボスマン判決」である。ボスマン判決の「ボスマン」とは、ベルギー人のジャン＝マルク・ボスマン（Jean-Marc Bosman）に由来するものであり、ボスマンは、ベルギーリーグ 2 部の RFC リエージュに所属する選手であったが、1990 年、同クラブとの 2 年契約が完了したため、契約期間満了後にフランス 2 部リーグの USL ダンケルクと契約を締結しようとした。ところが、RFC リエージュが、ボスマンの所有権を主張し、USL ダンケルクに対し移籍金を求めたところ、これに対して、ボスマンが、RFC リエージュに対して、保有権の放棄を求めてベルギー国内の裁判所に提訴した事件に対してなされた判決である。判決の具体的内容は次項で述べるとおりであるが、この判決を契機として、欧州においてサッカー選手の移籍が活発に行われるようになり、その波は世界にも波及していった。

２）海外で活躍する日本人選手の増加

日本人選手の海外移籍が増加したのは、近年になってのことである。日本代表が初めて FIFA ワールドカップ本大会に出場した 1998 年より前に、海外に移籍した日本人サッカー選手は以下のとおりであり、5 年から 10 年に一人程度の割合で海外リーグにおいてプレーする日本人選手が登場する程度であった。

表 2　1998 年以前の日本選手の海外移籍

移籍年	選手名	移籍先
1977 年	奥寺康彦氏	1FC ケルン（西ドイツ）
1982 年	尾崎加寿夫氏	アルミニア・ビーレフェルト（西ドイツ）
1984 年	風間八宏氏	バイヤー・レバークーゼン（西ドイツ）
1994 年	三浦知良氏	ジェノア（イタリア）

しかし、1998 年の FIFA ワールドカップ本大会への初出場を契機として、この状況に変化が生じ始めた。まず、1998 年 FIFA ワールドカップフランス大会終了後、中田英寿氏が、ペルージャ（イタリア）に移籍し、デビュー戦となったユベントス戦で 2 得点を挙げる活躍をすると、現役を引退する 2006 年まで、欧州のチームに所属し、プレーを続けた。中田氏以降も、1999 年には名波浩氏（ヴェネツィア（イタリア））、2000 年には城彰二氏（バジャドリード（スペイン））、西澤明訓氏（エスパニョール（スペイン））、2001 年には稲本潤一氏（アーセナル（イングランド））、小野伸二氏（フェイエノールト（オランダ））、広山望氏（セロ・ポルティーニョ（ポルトガル））、川口能活氏（ポーツマス（イングランド））と海外移籍する選手が続々と続いた。

この傾向に、さらに拍車がかかったのは、2010 年 FIFA ワールドカップ南アフリカ大会において、日本代表がグループリーグを勝ち上がり、ベスト 16 進出を果たした後である。これ以後、日本人選手の海外移籍は飛躍的に増加することとなり、2010 年には 9 名、2011 年には 5 名、2012 年には 7 名の選手が、新たに海外へ移籍した。

これにより、2000 年当時は、欧州リーグでプレーする日本人選手はわずか 1 名のみであったのが、2013 年には、各国のトップリーグ以外（2 部リーグ以下）でプレーする選手も含めれば、30 名を優に超える選手が、欧州のチームに所属し、プレーをしている状況になっている。イングランド、スペイン、イタリア、ドイツ、フランスという欧州 Big5 と呼ばれるリーグの一部リーグに所属する日本人選手数は、図 2 のとおり合計 15 人に上り、その内訳は、ドイツが最多の 9 人、次いで、イングランドの 4 人、イタリア、オランダ、ベルギー各 2 名と続いている。

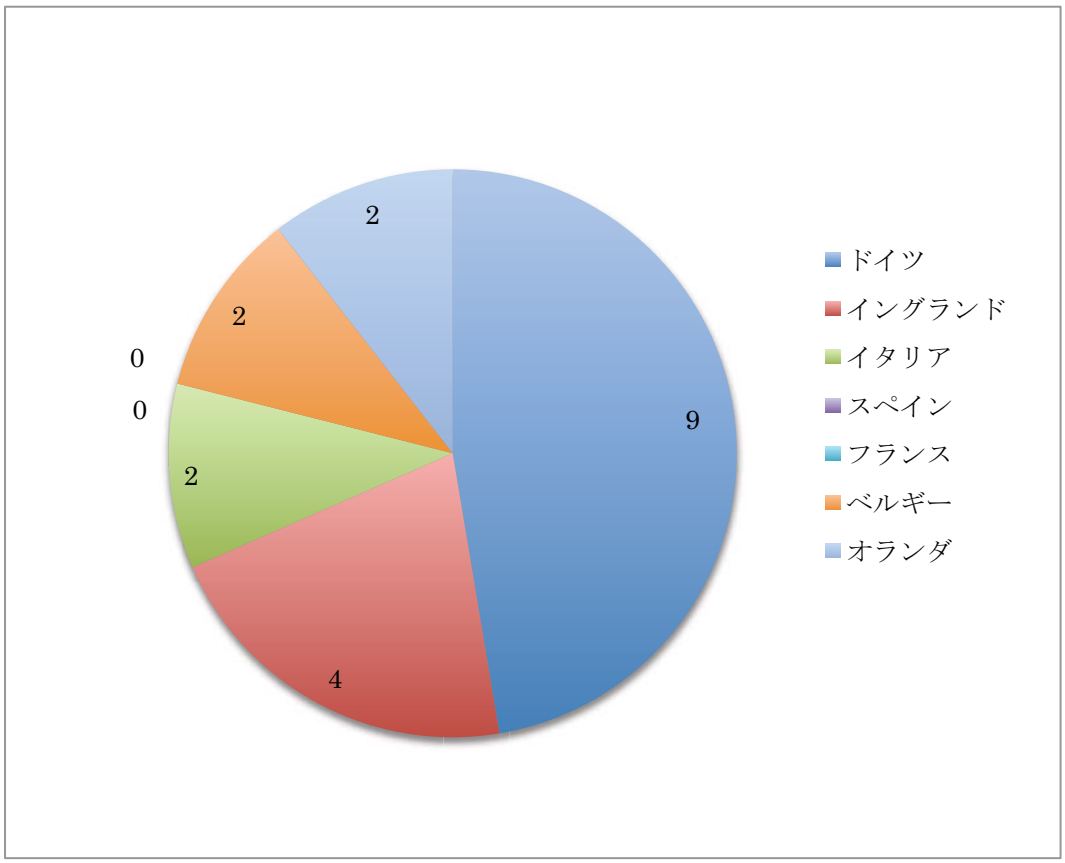

図 2　欧州リーグ所属日本人選手数（2014 年 1 月 7 日現在）

Transfermarkt.co.uk　より筆者作成

さらに、日本代表チーム 23 名のうち、海外リーグ所属の選手数の推移は図 3 のとおりである。FIFA ワールドカップ初出場時、日本代表には海外リーグ所属選手は一人もいなかったが、2013 年コンフェデレーションズカップ時の日本代表は、海外リーグに所属する選手が半数以上を占めるに至っている。

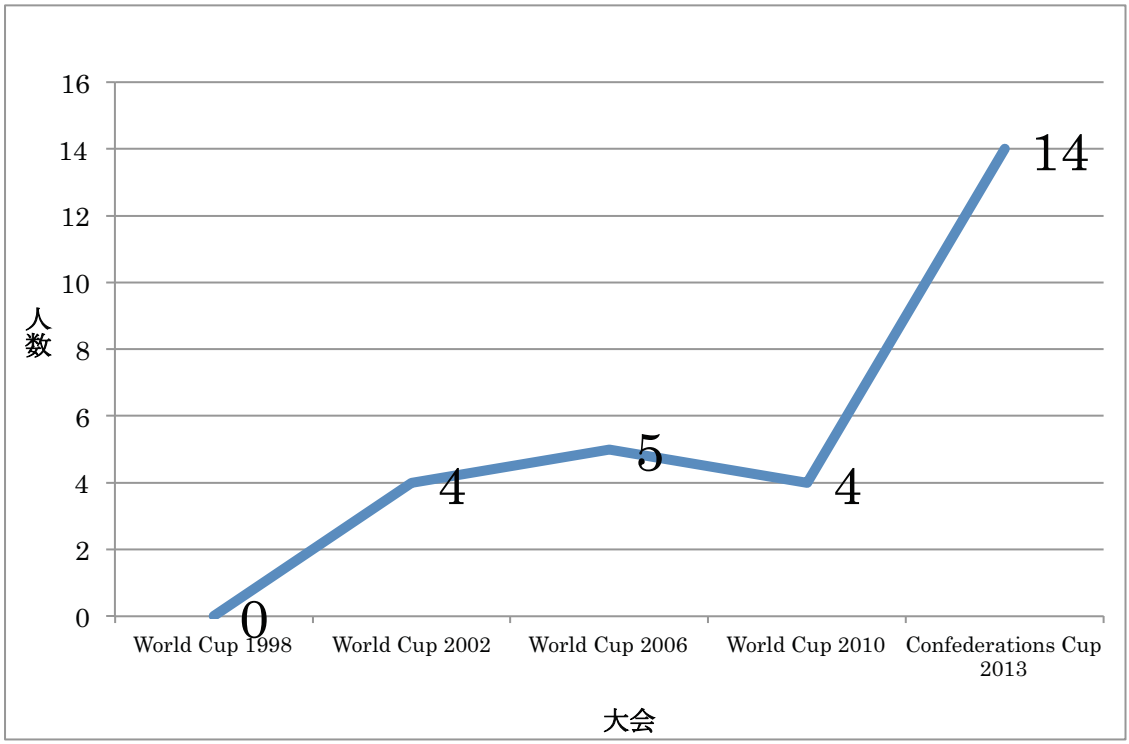

図 3　日本代表　海外リーグ所属選手数

前項で述べた日本代表の国際大会での躍進は、海外リーグに所属する日本人選手の増加と時期を同じくしている。このことから、より多くの日本人選手が、海外、特に、世界中から優秀な選手が集まる欧州リーグに所属し、プレーをすることが、日本人選手の技術向上につながり、ひいては、日本代表の強化にも資するものと考えられる。そして、欧州の中でも、特にレベルの高いリーグにより多数の日本人選手を送り込むことが、日本人選手のより一層の競技力向上の近道となるものと考えられよう。

第 3 項　移籍に関するルール

１）ボスマン判決の判示事項

選手の移籍に関連し、現在のルールに大きな影響を及ぼしているものは、前述したボスマン判決である。

ボスマン判決においては、①ヨーロッパ連合（EU）に加盟する国の国籍を持つプロサッカー選手が、所属したクラブとの契約期間が満了した場合、EU 加盟国内の他のクラブチームへは、移籍金なしで自由に移籍できる（契約期間満了

後は、クラブが選手の所有権を主張できない）②EU 加盟国内のクラブチームは、EU 加盟国籍を持つ選手を外国籍扱いにできない、という判断がなされた。これが、現在も、欧州における移籍に関するルールとして通用している。

２）FIFA Regulations

FIFA の規則としては、「Regulations on the Status and Transfer of Players」（通称「SRTP」）が、選手の地位と移籍に関して規定している。RSTP18 条 3 項では、「所属クラブとの契約が満了したか、あるいは 6 か月以内に満了予定のときにだけ、プロ選手は別のクラブと自由に契約を締結できる。」として、契約期間満了後は別のチームと自由に契約を締結できることを規定しており、ボスマン判決①の考え方が、EU 加盟国内に限らず適用されることを明らかにしている。

また、SRTP では、移籍に伴って金銭の支払いが発生する場合について、①Training Compensation 及び②Solidarity mechanism の 2 つを規定している。それぞれの内容は、以下のとおりである。

Training Compensation：（SRTP19 条、別紙 4）

23 歳以下の選手がサッカーのプロチームと最初に契約した場合のみならず、23 歳以下で移籍をした場合にも、その選手を獲得したクラブは、その選手が 12 歳から 21 歳までプレーしたクラブ、すなわち育成してもらったクラブに対して、Training Compensation（TC）を支払うことを義務付けている。

Solidarity Mechanism：（SRTP20 条、別紙 5）

選手が、所属チームとの契約期間の途中で他のチームに移籍をした場合に、当該選手を獲得したクラブが、その選手が 12 歳から 23 歳までの間に所属したクラブに対し、当該選手の育成に貢献したことの補償として、移籍に伴って生じた移籍金の 5%を Solidary Contribution Compensation として支払う義務を負うこととした制度。育成したクラブによる申告制であり、12 歳から 15 歳まで所属したクラブは 1 年当たり移籍金の 0.25%、16 歳から 23 歳までのクラブは 0.5%を、移籍先に請求することができる。Solidary Contribution Compensation は、選手の移籍に伴って移籍金が発生する国際移籍のたびに支払われるものであり、TC と異なり、23 歳以下の時の移籍に限定されない。そのため、クラブ

は、請求をお粉らなければ、当該選手が移籍するたびに補償を受け取ることができる。

３）欧州各リーグにおける外国人枠

欧州のサッカーリーグにおいては、J リーグと同様に、1 チームにおいて登録又は同時に試合に出場できる外国人の人数の制限（外国人枠）を設けているリーグが存在する。これらの国では、日本人選手は、外国人枠の影響を受けることとなる。

欧州の主要リーグの外国人枠は、表 3 のとおりとなっている。

表 3　欧州リーグ外国人枠

イングランド	・EU 及び EFTA 加盟国の国籍を持つ選手は、登録制限なし ・その他の地域の選手についても、登録人数に制限はないが、労働ビザ獲得のためには、直近 2 年間の国際 A マッチの 75%以上に出場していることが条件とされている。 なお、イングランドプレミアリーグでは、Home Grown Rule（トップチームの登録人数を 25 人以内とし、21 歳の誕生日を迎えるシーズンの終了までに、イングランド及びウェールズのチームで 3 シーズンまたは 36 カ月以上プレーした選手を 8 人以上登録しなければならない）がある。
スペイン	・EU 加盟国の国籍を持つ選手以外の選手（EU 圏外選手）の獲得・保有は無制限。 ・EU 加盟国以外の国籍の選手は、ベンチ入り、出場とも 3 名以内。 （EFTA 加盟国、トルコ、コトヌー協定加盟国の選手は、EU 圏外選手に算入されない。）
イタリア	・EU 加盟国、加盟申告中の国及び EFTA 加盟国の国籍を持つ選手は無制限。 ・EU 圏外の選手の登録については、以下のとおり。 － 2002 年 7 月 18 日以前にイタリアのクラブと契約した選手は、UR 圏外選とみなされない。 － 毎年 8 月 31 日までに新たにイタリアのクラブと契約を結ぶ EU 圏外選手の登録については、以下のとおり。 ① EU 圏外選手を保有していない場合 → 3 名の EU 圏外選手獲得可 ② EU 圏外選手を 1 名保有 → 2 名の EU 圏外選手を獲得可。 ③ EU 圏外選手を 2 名保有 → 1 名の EU 圏外選手の保有可。

	加えて、いかのいずれかにより、もう 1 名獲得可 ア　保有する EU 圏外選手を 1 名国外へ移籍させる イ　同選手と契約を解除する ウ　同選手が EU パスポートを取得する ④　EU 圏外選手を 3 名保有 →　上記 3 の条件アまたはウの条件付で 2 名獲得可。 イの条件の場合には、1 名のみ獲得可
フランス	・EU 加盟国の国籍を持つ選手は無制限 ・EU 加盟国以外の国籍選手の登録は 3 人まで。試合に出場する選手の人数は制限なし。 ただし、アフリカ大陸の選手は、コトヌー条約により外国人とはみなされない。
ドイツ	・各チームは、ドイツ国籍を持つ選手 12 人と契約し、そのうち 6 人が各々の地元で育成された選手でなければならない。 ・以上を満たせば、それ以外の選手の登録に制限はなし。
オランダ	・ドイツ同様、自国枠あり。 ・上記を満たせば、それ以外の選手の登録に制限はなし。
ベルギー	外国人の登録の制限なし。
ポルトガル	・EU 加盟国の国籍を持つ選手は無制限。ブラジル国籍の選手も無制限。 ・それ以外の国籍の選手は、チームへの登録は 6 人まで、一試合の選手登録は 4 名まで。

第 4 項　移籍における代理人の役割

代理人に関する FIFA 規則である「FIFA Player's Agents Regulations」（以下「FIFA 代理人規則」という。）において、選手代理人とは、選手契約締結のための交渉若しくは再交渉を行うことを意図して選手をクラブに紹介し、または、選手の移籍に関する契約を締結するために 2 つのクラブを相互に紹介する業務を、報酬を得て行う自然人と定義されている。要すれば、代理人の仕事とは、選手を代理して、クラブと当該選手との間で選手契約を締結するために、その条件等について交渉を行うというものであり、所属チームとの契約交渉がメインの業務となる。そして、契約交渉の派生として、他のクラブチームに移籍する際の交渉の代理や、選手が解雇された場合の再雇用先となるチームの模索といった業務も行うこととなる。さらに、これらの契約交渉のみならず、メディアへの出演等本業であるサッカー以外の業務や、財政面の管理まで含めた

マネジメントを行うケースも存在する。

1995 年のいわゆる「ボスマン判決」をきっかけとして、欧州においてサッカー選手の移籍が活発化し、選手の流動性が高まると同時に、優れた選手を獲得するために、他のクラブよりも高い移籍金を払うという競争が激化し、これが移籍金の高騰を招いた。近年の移籍における移籍金額上位５例は表 4 のとおりであり、最高額である Cristiano Ronaldo 選手の移籍金は、日本円に換算すると約 130 億円にも上った。

表 4　歴代移籍金上位 5 選手

	選手名	移籍年	移籍元	移籍先	移籍金額(€)
1	Cristiano Ronald	2009	Manchester United	Real Madrid	94,000,000
2	Gareth Bale	2013	Tottenham Hotspur	Real Madrid	91,000,000
3	Zinédine Zidane	2001	Juventus FC	Real Madrid	73,500,000
4	Zlatan Ibrahimovic	2009	Inter Milan	FC Barcelona	69,500,000
5	Kaká	2009	AC Milan	Real Madrid	65,000,000

Transfermarkt.co.uk より筆者作成

このような移籍金の高騰により、選手の移籍金を重要な収入源と考え、所属選手を積極的に移籍させようとするクラブも出現しており、また、移籍金から報酬を得ることを目的とした代理人による売り込みも増加したものと考えられる。これにより、さらに選手の移籍が活発となっており、現在では、選手をクラブに売り込み、移籍を成立させるという業務の重要性が増しており、これが代理人のメインの業務とさえ考えられるようになっている。そして、近年では、代理人による売り込み方如何が、選手の移籍先やその成否を左右するようになっており、選手移籍において代理人の果たす役割は一層重要となっている。

第 5 項　問題意識

上記のとおり、海外リーグでプレーする日本人選手の増加に伴い、日本代表の国際大会での実績も向上している関係が伺えることを考えると、我が国のサッカー選手の競技力をより一層向上させるためには、より多くの選手をよりレベルの高いリーグに移籍させることが有効な方法となるのではないかと考えている。そのためには、数多く存在する欧州のリーグの中でも、最もレベルが高

いリーグを見極めた上で、そこに日本人選手を送り込むために、どのようなルートで選手を移籍させることが効率的であるかといった点を考慮した戦略的な移籍を行うことが重要ではないか、という点に、筆者の問題意識がある。

第２節　先行研究

竹石ら（2009）は、日本人選手が、海外に移籍する際に、移籍金が発生しない移籍がほとんどとなっている問題点を捉え、移籍金額の評価・交渉について、代理人としていかなる業務をするかという観点での研究を行っている。また、樋川（2010）は過去のサッカー選手の移籍に関する問題点を検証し、代理人制度、代理人の職務のあり方に関する考察を行っている。

このように、代理人の職務一般としての問題点やそのあり方について研究した論文はいくつか存在するが、これまで欧州のサッカーリーグのレベルについて、所属選手及び所属チームの実力の双方の観点から比較をしたデータ、文献は存在しない。また、その欧州のリーグの中で最もレベルが高いリーグを見極めた上で、J リーグ選手が、最終的に当該リーグへステップアップするために、どのような海外移籍ルートが効果的であるかについても詳細なデータはない。

第３節　研究目的

本研究の目的は、より多くの日本人選手が、欧州の中でも最もレベルの高いリーグでプレーする状況を実現するために、どの海外リーグに最初に移籍すべきかを明らかにすることにある。

第２章 研究手法

研究目的を達成するために、まず、【研究１】として、下記第１節記載の各調査から、欧州各国のリーグの中でも、特にレベルが高いと考えられるリーグがいずれであるかを検証した。

その上で、【研究２】として、【研究１】において、「レベルが高い」という検証結果が導き出されたリーグへ、当該国以外、特に欧州以外の国籍の選手が移籍するルートについて、文献調査等を行った。

第１節　【研究１】欧州サッカーリーグのレベルに関する調査

第 1 項　FIFA ワールドカップ及び UEFA 欧州選手権の出場選手の所属リーグに関する調査

FIFA ワールドカップ（FIFA World Cup）は、サッカーにおける最高峰の大会と位置づけられる大会であり、各サッカー協会及びサッカー選手の最大の目標とされる大会である。このような最高峰の大会であるワールドカップの出場選手が多数所属しているリーグは、選手レベルが高いことを意味しているといえ、当該リーグのレベルの高さを示す指標足りうるものと言える。

そこで、FIFA ワールドカップの過去３大会（2002 年日韓共催大会、2006 年ドイツ大会及び 2010 年南アフリカ大会）出場国の選手各 23 名が、FIFA ワールドカップの大会の時点で所属していたリーグを調査し、各リーグごとの所属人数を集計するとともに、その推移を検証する。

また、UEFA が主催する欧州におけるナショナルチームによる大陸選手権である欧州選手権（UEFA European Football Championship）についても、同様に本戦（予選を勝ち抜いた 16 チーム）に出場した国（協会）の選手各 23 名の所属リーグを集計し、その推移を検証した。

第 2 項　UEFA リーグランキングの推移

欧州サッカー連盟（Union of European Football Associations ; UEFA）は、UEFA 所属各サッカー協会が運営するリーグから、UEFA チャンピオンズリーグ（UEFA Champions League ; UEFA CL）、UEFA ヨーロッパリーグ（UEFA Europe League ;UEFA EL）といった、UEFA 主催の大会に参加できるクラブ数を決めるために、UEFA リーグランキングを設定している。UEFA リーグラ

ンキングの決定方法は、以下の計算により各リーグが獲得したポイント順である。すなわち、各協会所属のクラブが、チャンピオンズリーグ及びヨーロッパリーグの試合に勝利した場合には 2 ポイント、引分は 1 ポイントを獲得するものとし（ただし、UEFA CL および UEFA EL の各予選においては、ポイントは半分になる。）、1 シーズンに獲得したポイントを合計する。この各試合の結果によるポイントの他、ボーナスポイントとして、UEFA CL 本戦に参加した段階で 4 ポイント(2008-09 シーズンまで 3 ポイント)、決勝トーナメント進出で 5 ポイントが、UEFA CL、UEFA EL 共に、ベスト８以上に進出すると、各段階（ベスト８、ベスト４、決勝）で 1 ポイントが加算される。これらの計算により、各クラブが獲得したポイントを所属協会ごとに合計し、UEFA CL、UEFA EL の 2 大会に参加したクラブ数で割ることで、当該協会のランキングポイントが決定される（小数点以下第 3 位まで計算）。そして、過去 5 シーズンのポイントの合計でランキングが決定され、ランキング上位の協会からはより多くのクラブが UEFA CL および UEFA EL に参加できることとなる。

UEFA リーグランキングにおいて上位ランクされる協会のリーグは、欧州において、他のリーグ所属のチームを交えた UEFA CL および UEFA EL において当該協会所属のクラブがおしなべて好成績を残していることを意味するといえ、UEFA リーグランキングは、欧州における当該リーグのレベルの高さを推し量る要素の１つとなる。

そこで、UEFA リーグランキングの過去１０年の推移を検証し、継続的に上位にランクされているリーグがいずれであるかを検証する。

第 3 項　UEFA チャンピオンズリーグにおける各リーグの成績調査

UEFA CL において好成績をおさめているチームは、欧州のクラブチーム全体の中においても強いチームと位置づけられるといえ、このようなチームが多数所属しているリーグは、それだけレベルが高いと考えられる。

そこで、過去 10 年の UEFA CL において、決勝トーナメント（ベスト 16）以上に進出したチーム数を集計する。その上で、ベスト 16 進出チームの中でも、より上位の成績を残したチームを高く評価する観点から、成績に応じて、優勝は 5 点、準優勝は 4 点、ベスト 4 は 3 点、ベスト 8 は 2 点、ベスト 16 は 1 点を獲得するものとし、これを所属リーグごとに合計して、点数の多い順にランク付けを行った。

第２節　移籍ルートに関する文献調査

【研究１】において、レベルの高いリーグと考えられるリーグへ、より多くの日本人選手を送り込むにあたり、どのようなルートが考えられるかを検証する。すなわち、当該リーグへの移籍の道筋としては、大きく分けて、①日本から直接移籍するルート、②日本から、他国のリーグを経由して、上記国へ移籍をするルート、の２パターンが考えられる。

そこで、【研究 2】では、【研究 1】で導きだされたリーグへの移籍のために、どのようなルートが望ましいと言えるかにつき、過去の移籍に関する実績に基づいて、以下の点について分析し、検証する。

第 1 項　日本から当該リーグへの移籍の実績

【研究 1】において、レベルが高いと考えられたリーグに、過去に現実に所属した経験のある日本人選手の経歴を、実例に基づいて調査する。これに基づき、以下の点を検証する。

① 移籍形態（完全移籍かレンタル移籍か）

② 移籍経緯（上記のリーグへ移籍する前に所属していたリーグの調査）

③ 移籍時の平均年齢調査

移籍全体の平均年齢に加え、日本から当該リーグへ直接移籍した事例と、日本から他のリーグを経て移籍した場合とのそれぞれの場合の平均年齢も算出する。

第 2 項　他の欧州リーグから、当該リーグへの移籍実例調査

【研究 1】で、最もレベルが高いという結果が導かれたリーグに関し、2003 年以降の 10 年間に、当該リーグ以外の欧州リーグから当該リーグへ移籍した選手につき、移籍前にどのリーグに所属していたかを調査することにより、当該リーグへ移籍しやすいリーグを調査する。

なお、前述のとおり、ボスマン判決以降、欧州において、EU 加盟国の選手は自国選手と同様の扱いがなされているおり、外国籍選手としての扱いを受けない。これに対して、我が国の選手は、EU 加盟国の国籍の選手と同等の取り扱いを受けることはできず、外国籍選手として扱われる点を考慮する必要がある。そこで、上記に加え、過去 10 年の移籍のうち、欧州以外の国籍の選手の移籍の

みを抽出した移籍件数、移籍時の選手の平均年齢についても調査、分析する。

第 3 項　各リーグの移籍金収支調査

選手が、所属チームとの選手契約の有効期間の途中で移籍する場合には、当該選手を移籍により獲得しようとするチームは、当該選手の所属チームに対して移籍金を支払う必要がある。移籍金の性質は、選手が、所属チームとの間の選手契約を中途解約することに伴い生じる違約金であり、この違約金を、当該選手を獲得しようとするチームが肩代わりをするというものである。

移籍金は、その選手を獲得するために、チームとしていくら支払えるかを表すものであり、換言すれば、その選手の実力の一指標となるものである。実力の高い選手の獲得のためには高額の移籍金が支払われ、また、同じ選手であっても、実力が高まれば、以前よりも高額の移籍金が支払われることとなる。

以上の観点から、欧州各リーグについて、2003-2004 シーズンから、2012-2013 シーズンまでの 10 シーズンについて、移籍金収入、支出及び収支を調査する。移籍金による利益が大きければ大きいほど、当該リーグ所属中に選手が実力を伸ばしたと考えられることから、移籍金による収支は、当該リーグの選手育成力を図る指標となると考えられるためである。

第３章 研究結果

第 1 節　欧州サッカーリーグのレベルに関する調査

第 1 項　FIFA ワールドカップ及び UEFA 欧州選手権出場国の登録選手の所属リーグに関する調査

1)　FIFA ワールドカップ出場国の登録選手の所属リーグ

①　2002 年日韓共催大会

ア　出場国

FIFA ワールドカップ 2002 年日韓共催大会の出場国は表 5 のとおりである。

表 5　ワールドカップ 2002 出場国

ブラジル	ドイツ	トルコ	大韓民国
イングランド	セネガル	スペイン	アメリカ合衆国
デンマーク	ベルギー	スウェーデン	日本
アイルランド	イタリア	パラグアイ	メキシコ
ウルグアイ	フランス	南アフリカ共和国	スロベニア
コスタリカ	中華人民共和国	ポルトガル	ポーランド
カメルーン	サウジアラビア	アルゼンチン	ナイジェリア
クロアチア	エクアドル	ロシア	チュニジア

イ　2002 年日韓共催大会出場選手の所属リーグの集計結果

2002 年日韓共催大会出場 32 チームの登録選手各 23 名の合計 736 名が、本大会開催時点で所属していたチームの属するリーグの集計結果は表 6 のとおりであった。

表 6　ワールドカップ 2002 出場国登録選手所属リーグ

所属リーグ / 出場国	イングランド	スペイン	イタリア	ドイツ	フランス	オランダ	ポルトガル	ベルギー	その他
フランス	8	3	5	2	5				0
セネガル					21				2
ウルグアイ	1	5	8						9
デンマーク	6		3	1		4			9
スペイン		22	1						0

スロベニア	1		1	3			2	4	12
パラグアイ		1		1	1		1		19
南アフリカ	3		1	2		2	1	2	12
ブラジル		3	4	1	2				13
トルコ	4	1	4	1					13
中国	1			1					21
コスタリカ	1		1						21
韓国			1					1	21
ポーランド	1		1	6	2	1		2	10
アメリカ	6			3	1	2			11
ポルトガル	1	2	4		1		15		0
ドイツ	2			20	1				0
サウジアラビア									23
アイルランド	23								0
カメルーン	4	4	1	1	9				4
アルゼンチン	1	7	8	1	2				4
ナイジェリア	3	1		1	3	1		2	12
イングランド	22			1					0
スウェーデン	6	1	1	1	2	3			9
イタリア		1	22						0
エクアドル	1								22
クロアチア	4		4	7					8
メキシコ		3			1				19
日本	2		1			1			19
ベルギー	1			4	2	1		15	0
ロシア		4	1		1	1	1		15
チュニジア			3	1	2	1			16
合計	102	58	75	58	56	17	20	26	324

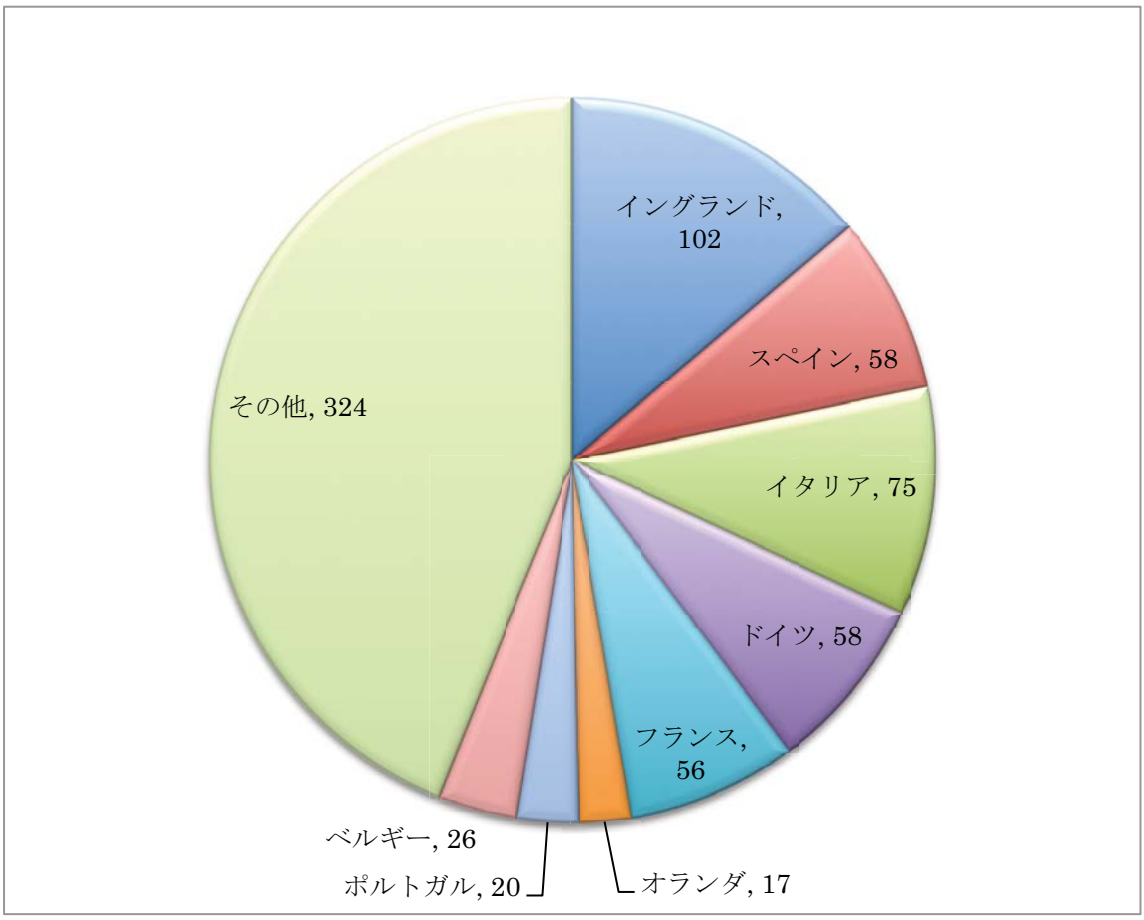

図 4　ワールドカップ 2002　出場国登録選手所属リーグ

SANSPO.com より筆者作成

最多の選手が所属していたリーグはイングランドの 102 名であり、以下、イタリア（75 名）、スペイン・ドイツ（各 58 名）、フランス（56 名）の順であった（図 4）。

ウ　ベスト 16 進出国の選手の所属リーグ

FIFA ワールドカップ 2002 日韓共催大会において、ベスト 16 に進出した国の出場選手の所属リーグの内訳は表 7 のとおりであった。

表 7　ワールドカップ 2002 ベスト 16 進出国登録選手所属リーグ

所属リーグ / 出場国	イングランド	イタリア	ドイツ	スペイン	フランス	ベルギー	オランダ	ポルトガル	その他
セネガル					21				2
デンマーク	6	3	1				4		9
スペイン		1		22					0
パラグアイ			1	1	1			1	19
ブラジル		4	1	3	2				13
トルコ	4	4	1	1					13
韓国		1				1			21
アメリカ	6		3		1		2		11
ドイツ	2		20		1				0
アイルランド	23								0
イングランド	22		1						0
スウェーデン	6	1	1	1	2		3		9
イタリア		22		1					0
メキシコ				3	1				19
日本	2	1					1		19
ベルギー	1		4		2	15	1		0
合計	72	37	33	32	31	16	11	1	135

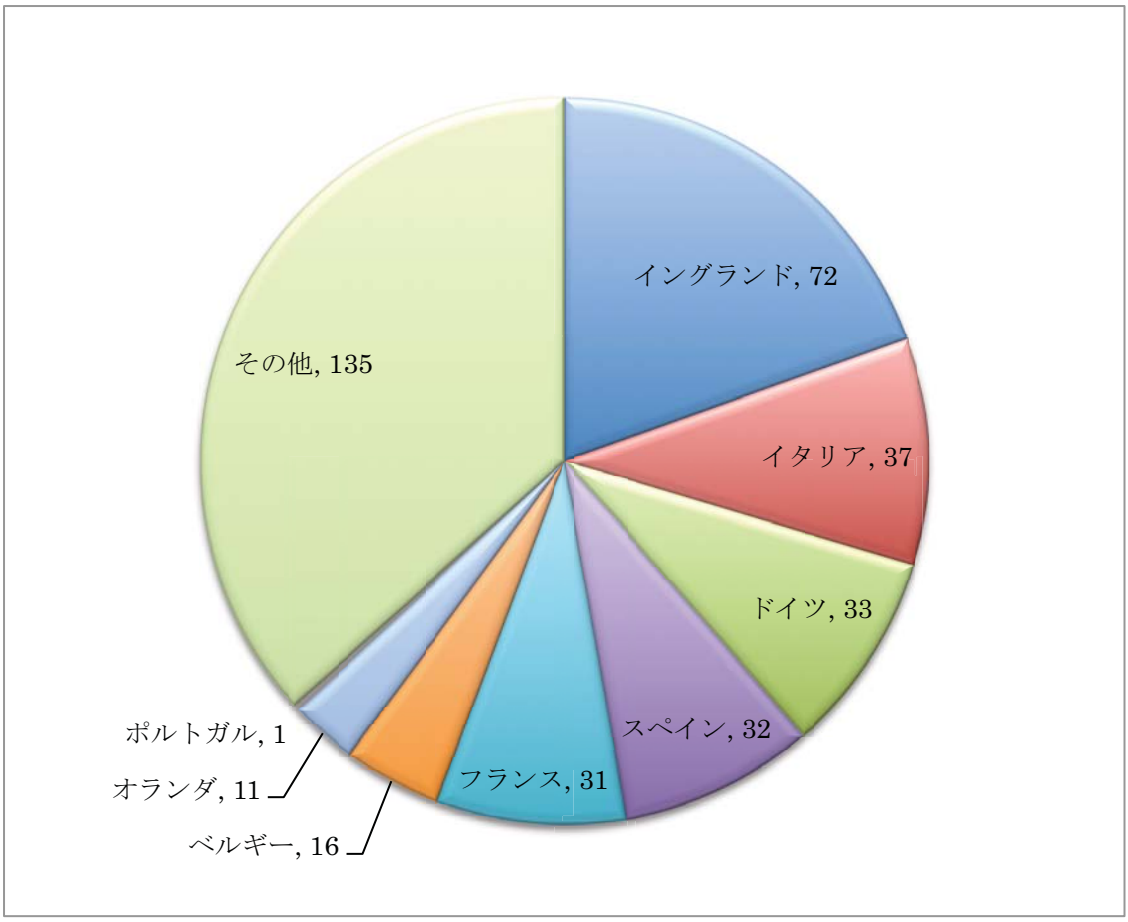

図 5　ワールドカップ 2002 出場国登録選手所属リーグ（ベスト 16 進出国）
SANSPO.com より筆者作成

イングランド所属選手の数が最も多い（72 名）結果は変わらず、2 位のイタリア（37 名）の約 2 倍という圧倒的な所属選手数を誇っている。以下、ドイツ（33 名）、スペイン（32 名）、フランス（31 名）がほぼ同数で追随しており、これら Big5 だけで、全体の 55.7%を占めている（図 5）。

② 2006年ドイツ大会

ア 出場国

FIFAワールドカップ2006年ドイツ大会の出場国は表8のとおりである。

表 8 ワールドカップ2006出場国

イタリア	フランス	ドイツ	ポルトガル
アルゼンチン	ウクライナ	イングランド	ブラジル
スウェーデン	メキシコ	オーストラリア	スイス
エクアドル	オランダ	ガーナ	スペイン
ポーランド	コスタリカ	パラグアイ	トリニダード・トバゴ
コートジボワール	セルビア・モンテネグロ	アンゴラ	イラン
チェコ	アメリカ合衆国	クロアチア	日本
大韓民国	トーゴ	チュニジア	サウジアラビア

イ 2006年ドイツ大会出場選手の所属リーグの集計結果

2006年ドイツ大会出場32チームの登録選手各23名の合計736名が、本大会開催時点で所属していたチームの属するリーグの集計結果は表9のとおりであった。

表 9 ワールドカップ2006出場国登録選手所属リーグ

所属リーグ / 出場国	イングランド	スペイン	イタリア	ドイツ	フランス	オランダ	ポルトガル	ベルギー	その他
ドイツ	1	2	1	19					0
コスタリカ			1						22
ポーランド	1			7	3	1		1	10
エクアドル	1	1							21
イングランド	23								0
パラグアイ		2	2	3		1			15
ドリニダード・トバゴ	9			1					13
スウェーデン	3		3	1	1	4		1	10
アルゼンチン	3	10	4				1		5
コートジボワール	3		1	1	13	1		1	3

セルビア・モンテネグロ	2	4	1	2	1				13
オランダ	6	2	3	3		7	1		1
メキシコ	1	2							20
イラン			1	4					18
アンゴラ	1				1		8		13
ポルトガル	2	6	1				10		4
イタリア			22		1				0
ガーナ	1		3	3	1	1			14
アメリカ合衆国	7			3		1		1	11
チェコ	2		3	5	2	2			9
ブラジル	3	3	1	2	2				12
クロアチア			3	5				3	12
オーストラリア	10	1	2	1		2			7
日本	2			1	1				19
フランス	7	2	1	1	12				0
スイス	2		2	7	4		1		7
韓国	3			1					19
トーゴ	1	1		1	7			2	11
スペイン	7	15		1					0
ウクライナ			1	1					21
チュニジア	2		1	2	7	1			10
サウジアラビア									23
合計	103	51	57	75	56	21	21	9	343

SANSPO.com より筆者作成

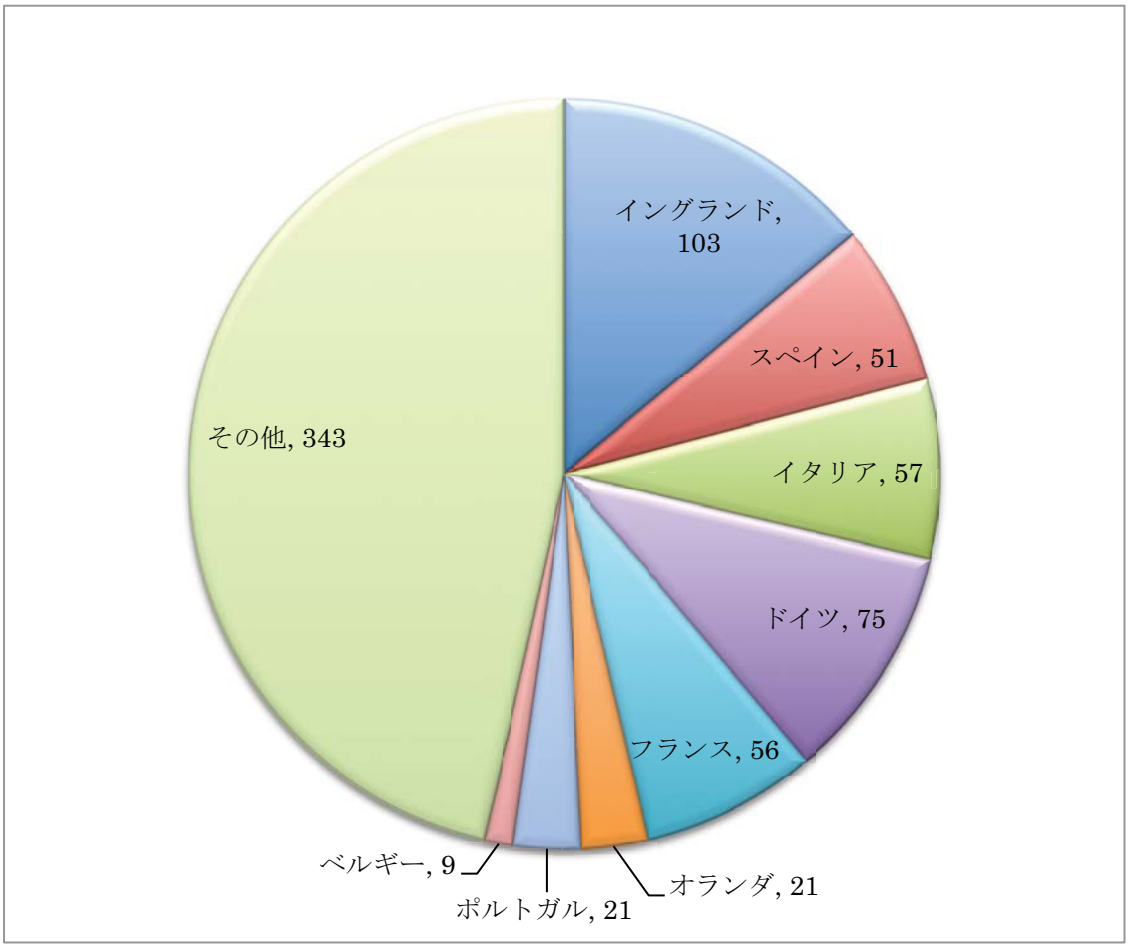

図 6　ワールドカップ 2006　出場国登録選手所属リーグ

SANSPO.com より筆者作成

最多の選手が所属していたのは、2002 年日韓共催大会と同様イングランドの 103 名であり、以下、ドイツ（75 名）、イタリア（57 名）、フランス（56 名）、スペイン（51 名）の順であった（図 6）。

ウ　ベスト 16 進出チームの選手の所属リーグ

FIFA ワールドカップ 2006 年ドイツ大会において、ベスト 16 に進出した国の出場選手の所属リーグの内訳は表 10 のとおりであった。

表 10　ワールドカップ 2006　ベスト 16 進出国登録選手所属リーグ

所属リーグ / 出場国	イングランド	スペイン	イタリア	ドイツ	フランス	オランダ	ポルトガル	ベルギー	その他
ドイツ	1	2	1	19					0
エクアドル	1	1							21
イングランド	23								0
スウェーデン	3		3	1	1	4		1	10
アルゼンチン	3	10	4				1		5
オランダ	6	2	3	3		7	1		1
メキシコ	1	2							20
ポルトガル	2	6	1				10		4
イタリア			22		1				0
ガーナ	1		3	3	1	1			14
ブラジル	3	3	1	2	2				12
オーストラリア	10	1	2	1		2			7
フランス	7	2	1	1	12				0
スイス	2		2	7	4		1		7
スペイン	7	15		1					0
ウクライナ			1	1					21
合計	70	44	44	39	21	14	13	1	122

SANSPO.com より筆者作成

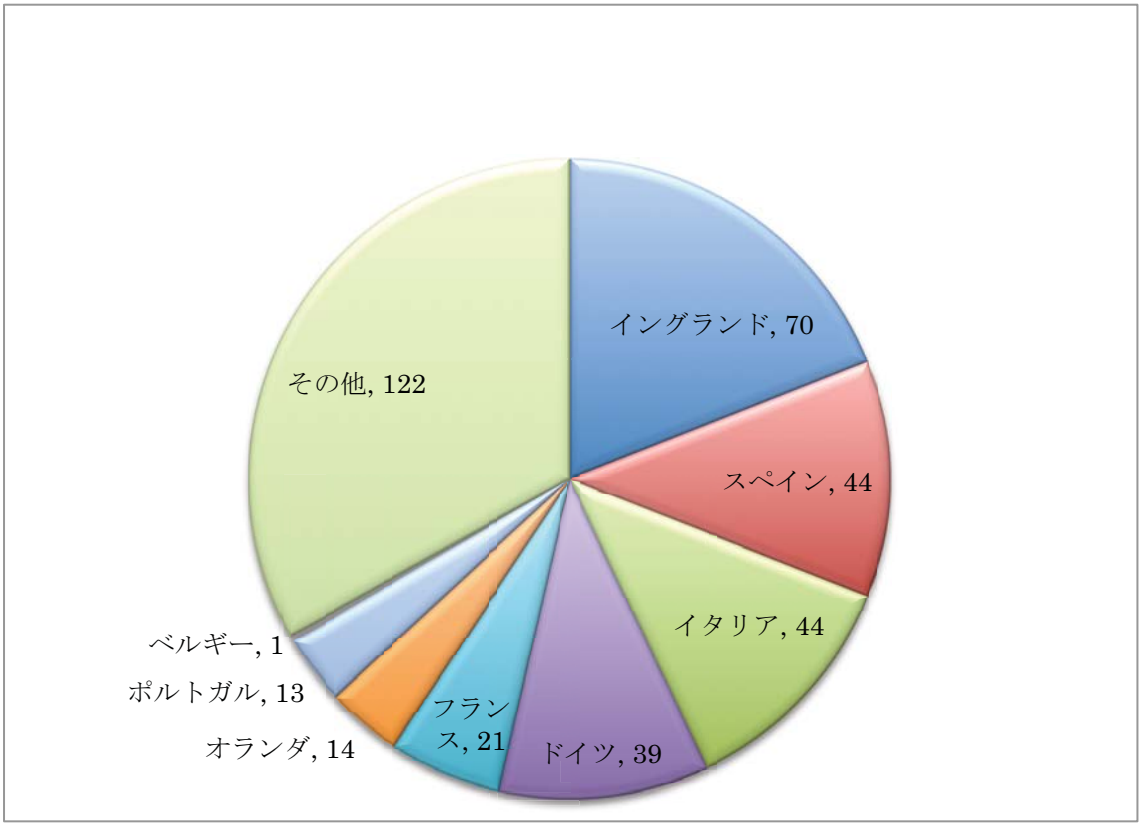

図 7　ワールドカップ 2006　出場国登録選手所属リーグ（ベスト 16 進出国）
SANSPO.com より筆者作成

最多は、やはりイングランドの 70 名であり、次いで、スペイン・イタリア（各 44 名）、ドイツ（39 名）、フランス（21 名）となり、2002 年に引き続き、ベスト 16 に残ったチームの選手の所属リーグ上位 5 位は Big5 が占めており、その割合は、59.24%となった（図 7）。

③　2010 年南アフリカ大会

ア　出場国

FIFA ワールドカップ南アフリカ大会の出場国は、表 11 のとおりである。

表 11　ワールドカップ 2010 出場国

スペイン	オランダ	ドイツ	ウルグアイ
ガーナ	ブラジル	アルゼンチン	パラグアイ
大韓民国	アメリカ合衆国	スロバキア	チリ

メキシコ	イングランド	日本	ポルトガル
南アフリカ共和国	フランス	ギリシャ	ナイジェリア
スロベニア	アルジェリア	オーストラリア	セルビア
デンマーク	カメルーン	ニュージーランド	イタリア
コートジボワール	北朝鮮	スイス	ホンジュラス

イ　2010 年南アフリカ大会出場選手の所属リーグの集計結果

2010 年南アフリカ大会出場 32 チームの登録選手各 23 名の合計 736 名が、本大会開催時点で所属していたチームの属するリーグの集計結果は表 12 のとおりであった。

表 12　ワールドカップ 2010 出場国登録選手所属リーグ

所属リーグ / 出場国	イングランド	スペイン	イタリア	ドイツ	フランス	オランダ	ポルトガル	ベルギー	その他
ウルグアイ		2	4			2	3		12
メキシコ	2	2				3			16
南アフリカ	3					1		1	18
フランス	7	3		1	11				1
アルゼンチン	4	3	6	1	1	1	1		6
韓国	2			1	1				19
ギリシャ	1		3	2					17
ナイジェリア	7	2		2	4	1			7
アメリカ	7		1	3	1				11
イングランド	23								0
スロベニア	1		4	4	2	3	1	2	6
アルジェリア	3	1	2	3	7		1		6
ドイツ				23					0
ガーナ	4	2	4	3	2	1			7
オーストラリア	7		2	1		2		1	10
セルビア	4	2	3	5		1	1	1	6
オランダ	5	1	1	5		10			1
日本			1	1	1				20
デンマーク	4	1	3	3		5			7
カメルーン	3	3	1	4	6	1			5
パラグアイ	2	1	1	3			1	1	14
スロバキア	3		2	5		1			12
ニュージーランド	5								18
イタリア			23						0
ブラジル	1	4	8	2	1		2		5
ポルトガル	3	6		1	1		10		2
コートジボワール	6	3		2	4	1		1	6
北朝鮮									23
スペイン	3	20							0

チリ	1	3	3	1			1		14
スイス	2		4	7	2	1			7
ホンジュラス	3		3					1	16
合計	116	59	79	83	44	34	21	8	292

SANSPO.com より筆者作成

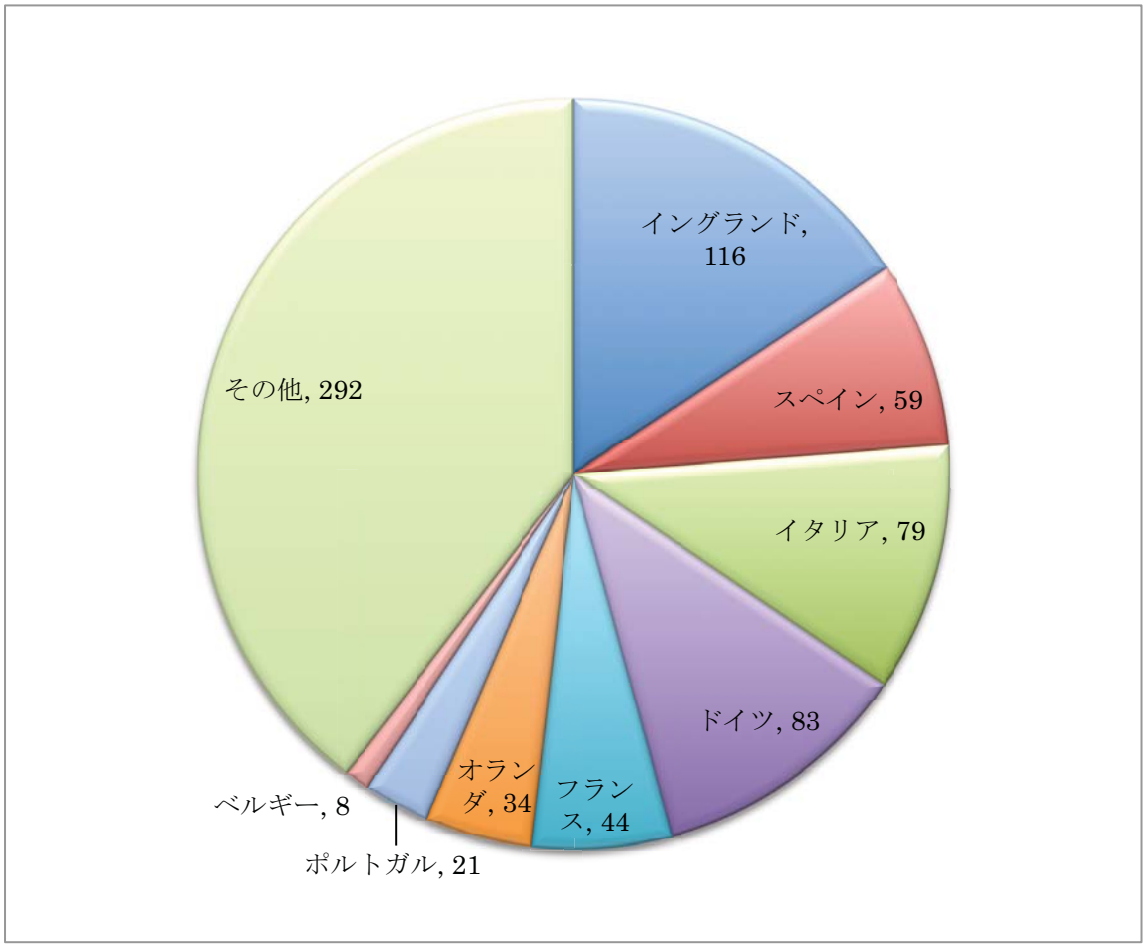

図 8　ワールドカップ 2010 出場国　登録選手所属リーグ

SANSPO.com より筆者作成

2010 年も、最多はイングランドで 113 名、次いでといつ（83 名）、イタリア（79 名）、スペイン（59 名）、フランス（44 名）となっているが、オランダ（34 名）が、上位 5 カ国に迫っていた（図 5）。

ウ　ベスト 16 進出チームの選手の所属リーグ

FIFA ワールドカップ 2010 年南アフリカ大会において、ベスト 16 に進出した国の出場選手の所属リーグの内訳は表 13 のとおりであった。

表 13　ワールドカップ 2010 ベスト 16 進出国登録選手所属リーグ

所属リーグ / 出場国	イングランド	ドイツ	スペイン	イタリア	オランダ	ポルトガル	フランス	ベルギー	その他
ウルグアイ			2	4	2	3			12
メキシコ	2		2		3				16
アルゼンチン	4	1	3	6	1	1	1		6
韓国	2	1					1		19
アメリカ	7	3		1			1		11
イングランド	23								0
ドイツ		23							0
ガーナ	4	3	2	4	1		2		7
オランダ	5	5	1	1	10				1
日本		1		1			1		20
パラグアイ	2	3	1	1		1		1	14
スロバキア	3	5		2	1				12
ブラジル	1	2	4	8		2	1		5
ポルトガル	3	1	6			10	1		2
スペイン	3		20						0
チリ	1	1	3	3		1			14
合計	60	49	44	31	18	18	8	1	139

SANSPO.com より筆者作成

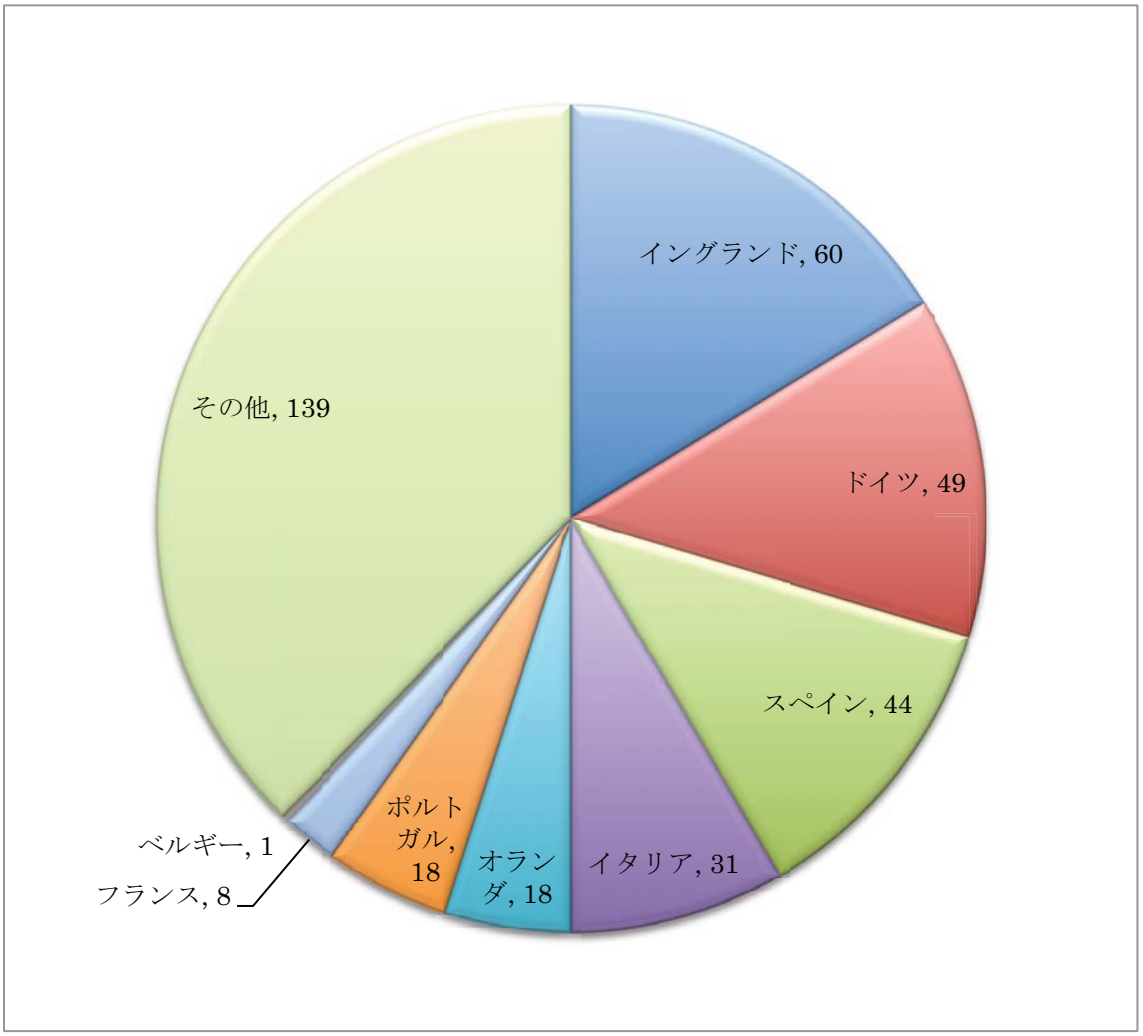

図 9　ワールドカップ 2010　出場国登録選手所属リーグ（ベスト 16 進出国）
SANSPO.com より筆者作成

2010 年大会においても、ベスト 16 進出チームの選手の所属リーグは、イングランドが最多（60 名）となっているが、2 位にはドイツ（49 名）が躍進しており、1 位と 2 位の差もわずか 11 名と接近している。以下、スペイン（44 名）、イタリア（31 名）と続いているが、5 位にはオランダとポルトガルが同数（18 名）で並んでおり、フランス所属選手数は 8 名で 7 位となっている。Big5 に所属する選手の割合は、52.17%となっており、2006 年大会よりも減少している（図 9）。

④　所属人数の推移

FIFA ワールドカップ 2002 年日韓共催大会から、2010 年南アフリカ大会までの 3 大会における出場選手のうち、欧州主要リーグに所属していた選手数の推移は表 14 のとおりである。

表 14　ワールドカップ出場国登録選手所属リーグ別人数の推移

	イングランド	スペイン	イタリア	ドイツ	フランス	オランダ	ポルトガル	ベルギー
2002	102	58	75	58	56	17	20	26
2006	103	51	57	75	56	21	21	9
2010	116	59	79	83	44	34	21	8

SANSPO.com より筆者作成

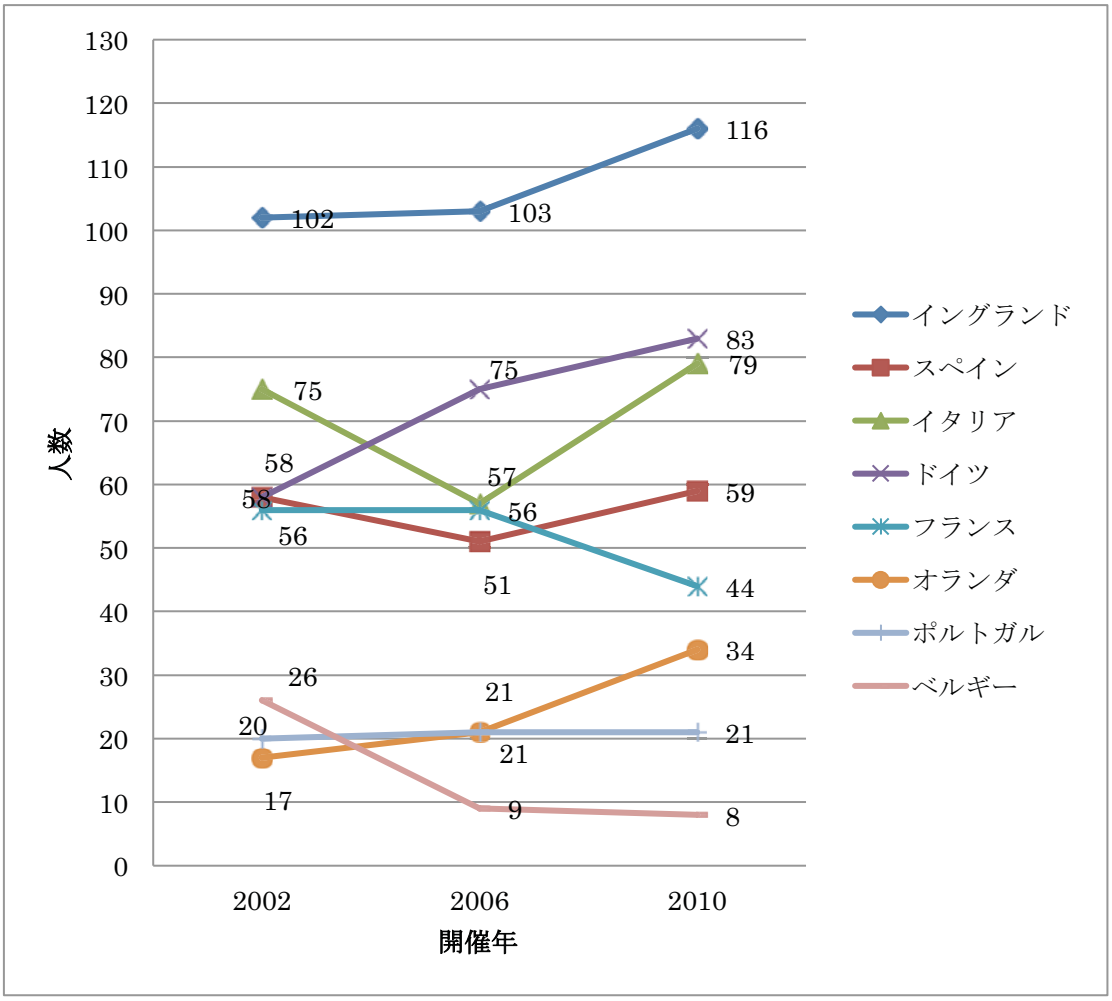

図 10　各国リーグ別ワールドカップ出場選手所属数の推移

SANSPO.com より筆者作成

過去 3 大会全てで、イングランドのチームに所属している選手が最多となっており、その選手数は、各大会で所属選手数 2 位となっているリーグの約 1.5 倍と圧倒的な数を誇っている。さらに、ワールドカップ出場選手のうちのイングランドリーグ所属人数は、大会を重ねるごとに増加傾向にある。

2 位以下では、イタリア、スペイン、ドイツが 2 位を争っているが、ドイツ所属選手数が増加傾向にあり、近年、台頭著しい結果となっている。イタリア、スペインは、所属人数の増減が見られるが、傾向としてはほぼ横ばいといえる。欧州 Big5 と呼ばれるリーグの中では、フランスリーグ所属の人数が減少傾向にあり、他から水を開けられつつある。

下位の中では、オランダも大会を重ねるごとに選手数が増加しており、2010 年大会では、Big5 の一角であるフランスに迫っている（図 10)。

2)UEFA 欧州選手権出場国の登録選手の所属リーグ

① 2004 年ポルトガル大会

ア 出場国

UEFA 欧州選手権 2004 年ポルトガル大会の出場国は、表 15 の通りである。

表 15 欧州選手権 2004 出場国

ギリシャ	ポルトガル	オランダ	チェコ
イングランド	スウェーデン	フランス	デンマーク
スペイン	ロシア	クロアチア	スイス
イタリア	ブルガリア	ドイツ	ラトビア

イ 出場選手の所属リーグ調査結果

2004 年ポルトガル大会出場 16 チームの登録選手各 23 名の合計 368 名が、本大会開催時点で所属していたチームの属するリーグの集計結果は図 11 のとおりであった。

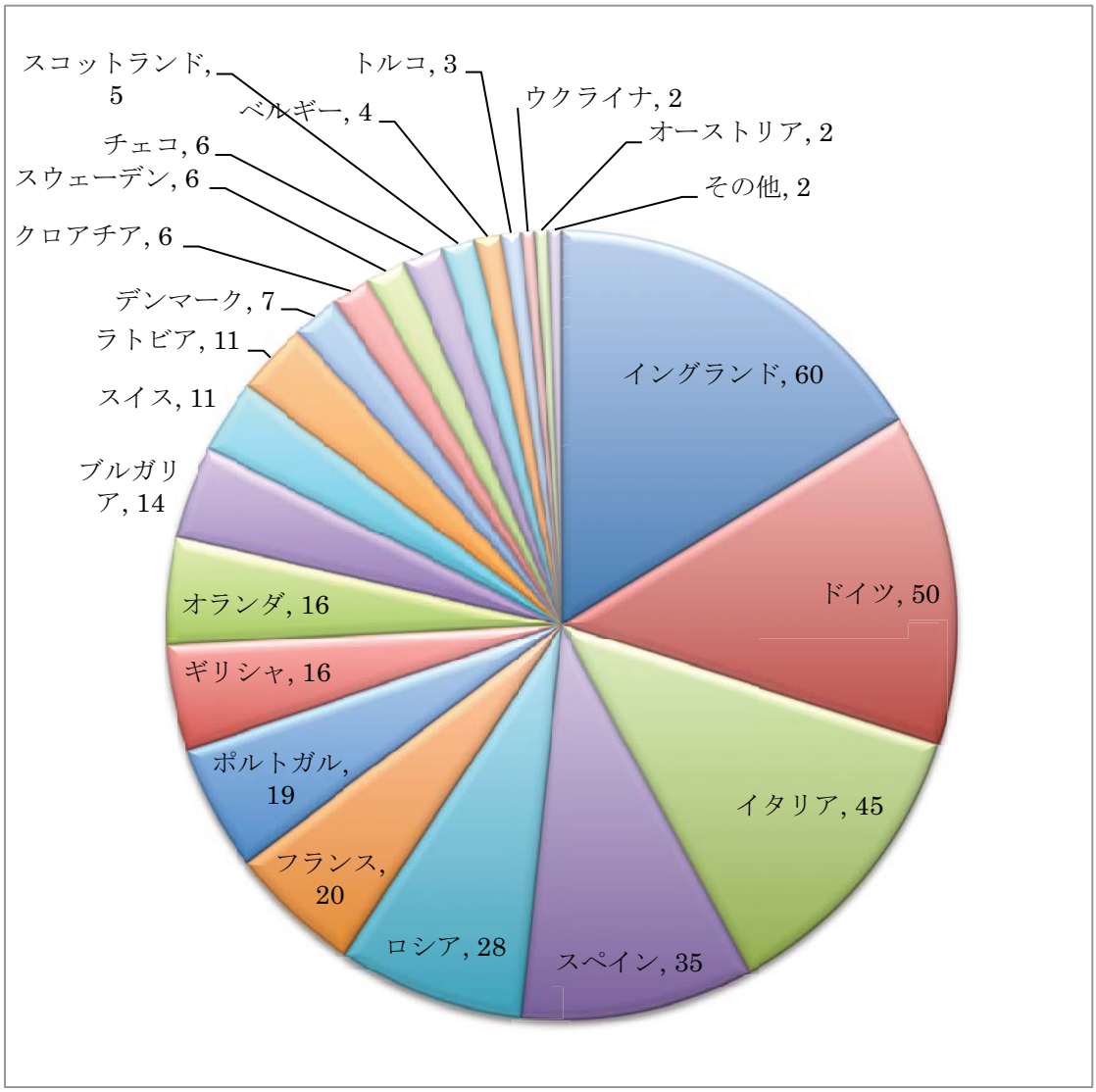

図 11 欧州選手縁 2004　出場国登録選手所属リーグ

http://euro2004.fc2web.com/より筆者作成

イングランド所属選手が最多の 60 人であった。以下、ドイツ（50 人）、イタリア（45 人）、スペイン（35 人）と続き、いわゆる Big5 の一つであるフランスリーグ所属選手数は 20 人と、ロシアの 28 人よりも少ない 6 位に留まった。

② 2008 年スイス・オーストリア共催大会

ア 出場国

UEFA 欧州選手権 2008 年スイス・オーストリア共催大会の出場国は、表 16 の通りである。

表 16　欧州選手権 2008 出場国

スペイン	ドイツ	トルコ	ロシア
ポルトガル	クロアチア	オランダ	イタリア
チェコ	スイス	オーストリア	ポーランド
ルーマニア	フランス	スウェーデン	ギリシャ

イ　出場選手の所属リーグ調査結果

2008 年スイス・オーストリア共催大会出場 16 チームの登録選手各 23 名の合計 368 名が、本大会開催時点で所属していたチームの属するリーグの集計結果は図 12 のとおりであった。

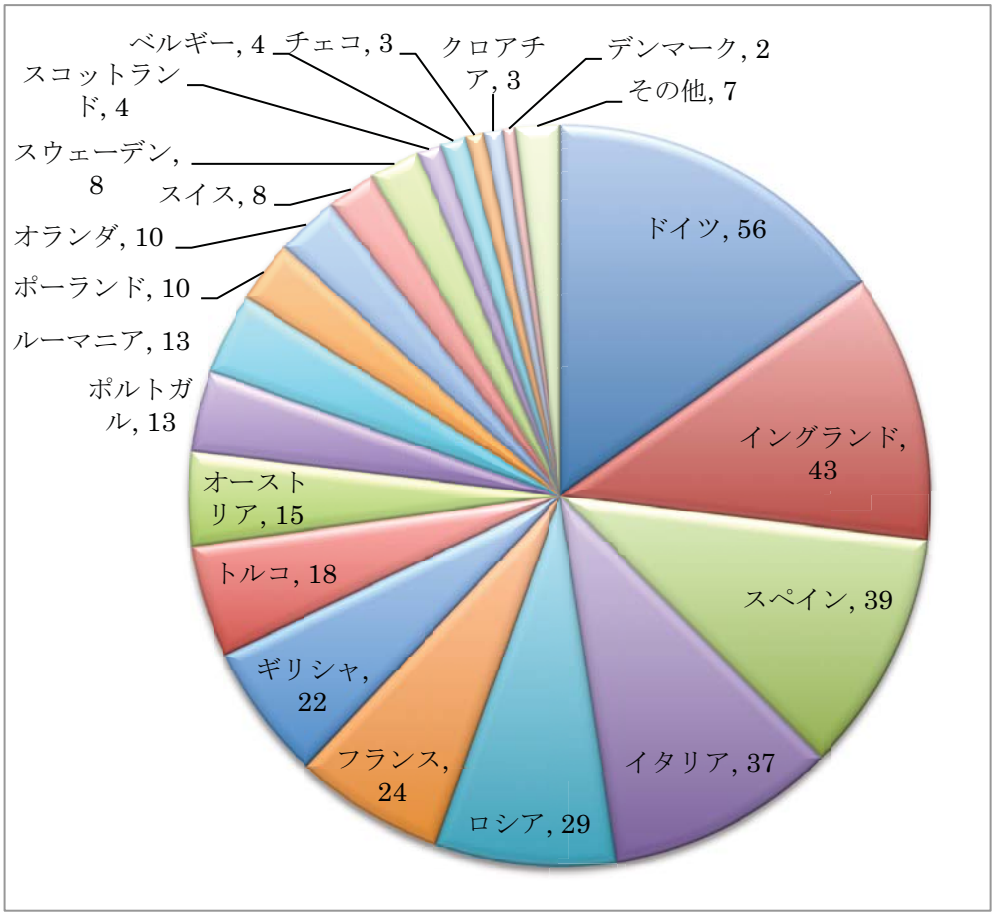

図 12　欧州選手権 2008 出場国登録選手所属リーグ

Sponichi ANNEX より筆者作成

今大会では、2004 年で 2 位であったドイツに所属する選手数が最多（56 人）となり、以下、イングランド（43 人）、スペイン（39 人）、イタリア（37 人）、ロシア(29 人)、フランス（24 人）と続き、上位 6 位までの顔ぶれは、順位の変動こそあるものの、2004 年大会と変化はなかった。

この中で、イングランドは、2004 年大会の首位を明け渡し、2 位に後退したように見える。しかし、イングランド代表は本大会への出場を逃しており、自国の選手が出場していない。そうであるにも関わらず、イングランドリーグ所属選手数が 2 位となっている事実は特筆すべき事実である。

③　2012 年ポーランド・ウクライナ共催大会

ア　出場国

UEFA 欧州選手権 2012 年ポーランド・ウクライナ共催大会の出場国は、表 17 の通りである。

表 17　欧州選手権 2012 出場国

スペイン	イタリア	ポルトガル	ドイツ
チェコ	フランス	ギリシャ	イングランド
ロシア	ポーランド	デンマーク	オランダ
クロアチア	アイルランド	ウクライナ	スウェーデン

イ　出場選手の所属リーグ調査結果

2012 年ポーランド・ウクライナ共催大会出場 16 チームの登録選手各 23 名の合計 368 名が、本大会開催時点で所属していたチームの属するリーグの集計結果は図 13 のとおりであった。

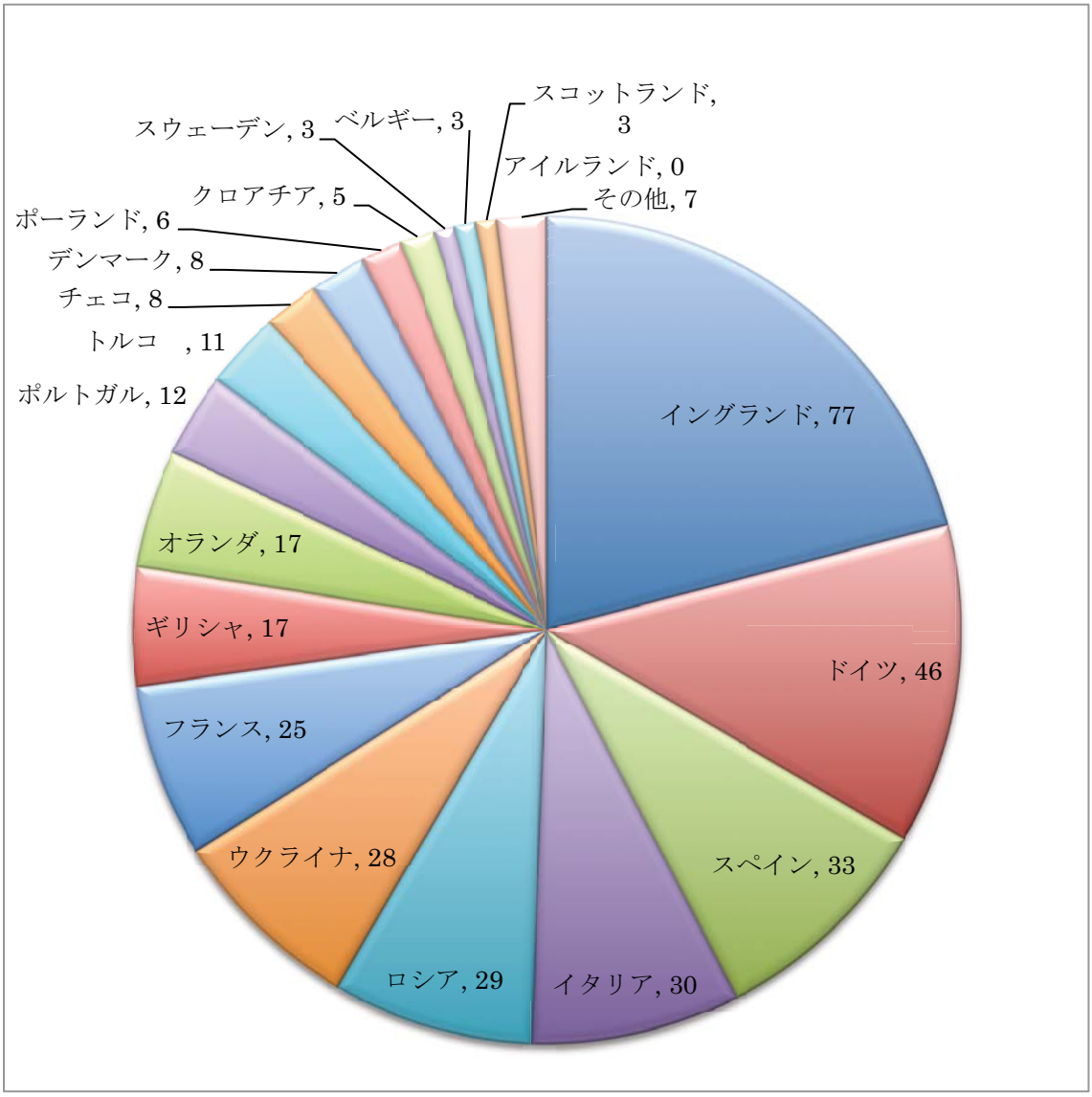

図 13　欧州選手権 2012 出場国登録選手所属リーグ

Sponichi ANNEX より筆者作成

イングランド代表チームが出場権を獲得した 2012 年大会では、イングランドリーグ所属選手数が最多（77 人）となり、首位を奪還した。以下、ドイツ（46 人）、スペイン（33 人）、イタリア（30 人）、ロシア（29 人）と続いている。フランス（25 人）は、ウクライナ（28 人）にも抜かれ、7 位とさらに順位を落とす結果となった。

第 2 項　UEFA リーグランキングの推移

過去 5 年間の UEFA リーグランキングの算定基礎となる 2004-2005 シーズンから 2012-2013 シーズンまでの期間における、上位 15 位までの各リーグのシーズンごとのポイントは表 18 のとおりである。

表 18　UEFA リーグランキング　シーズン別ポイント

	04-05	05-06	06-07	07-08	08-09	09-10	10-11	11-12	12-13
イングランド	15.571	14.428	16.625	17.875	15.000	17.928	18.357	15.250	16.428
スペイン	12.437	15.642	19.000	13.875	13.312	17.928	18.214	15.250	82.963
ドイツ	10.571	10.437	9.500	13.500	12.687	18.083	15.666	15.250	17.928
イタリア	14.000	15.357	11.928	10.250	11.375	15.428	11.571	11.357	14.416
ポルトガル	8.166	5.500	8.083	7.928	7.785	10.000	18.800	11.833	11.750
フランス	11.428	10.812	10.000	6.928	11.000	15.000	10.750	10.500	11.750
ロシア	10.000	10.000	6.625	11.250	9.750	6.166	10.916	9.750	9.750
オランダ	12.000	7.583	8.214	5.000	6.333	9.416	11.166	13.600	4.214
ウクライナ	8.100	5.750	6.500	4.875	16.625	5.800	10.083	7.750	9.500
ギリシャ	6.166	3.333	4.666	7.500	6.500	7.900	7.600	7.600	4.400
トルコ	5.375	4.000	6.100	9.750	7.000	7.600	4.600	5.100	10.200
ベルギー	6.125	5.500	4.700	4.500	4.500	8.700	4.600	10.100	6.500
デンマーク	1.500	3.500	6.125	5.125	8.200	4.400	6.700	3.100	3.300
スイス	2.625	9.375	4.100	6.250	2.900	5.750	5.900	6.000	8.375
オーストリア	7.625	3.250	1.500	3.200	2.250	9.375	4.375	7.125	2.250
スコットランド	4.750	4.250	6.750	10.250	1.875	2.666	3.600	2.750	4.300

UEFA.com より筆者作成

2009 年から 2013 年までの 5 年間におけるランキング対象ポイントの合計ポイントの推移は表 19 のとおりである。

表 19　UEFA リーグランキング推移

	2009	2010	2011	2012	2013
スペイン	74.266	79.757	82.329	84.186	88.025
イングランド	79.499	81.856	85.785	84.410	82.963
ドイツ	56.695	64.207	69.436	75.186	79.614
イタリア	62.910	64.338	60.552	59.981	64.147
ポルトガル	37.462	39.296	52.596	56.346	60.168
フランス	50.168	53.740	53.678	54.178	59.000
ウクライナ	41.850	39.550	43.883	45.133	49.758
ロシア	47.625	43.791	44.707	47.832	46.332
オランダ	39.130	36.546	40.129	45.515	44.729
トルコ	32.225	34.450	35.050	34.050	34.500
ベルギー	25.325	27.900	27.000	32.400	34.400
ギリシャ	28.165	29.899	34.166	37.100	34.000
スイス	25.250	28.375	24.900	26.800	28.925
デンマーク	24.450	27.350	30.550	27.525	25.700
オーストリア	17.825	19.575	20.700	26.325	25.375
スコットランド	27.875	25.791	25.141	21.141	15.191

UEFA.com より筆者作成

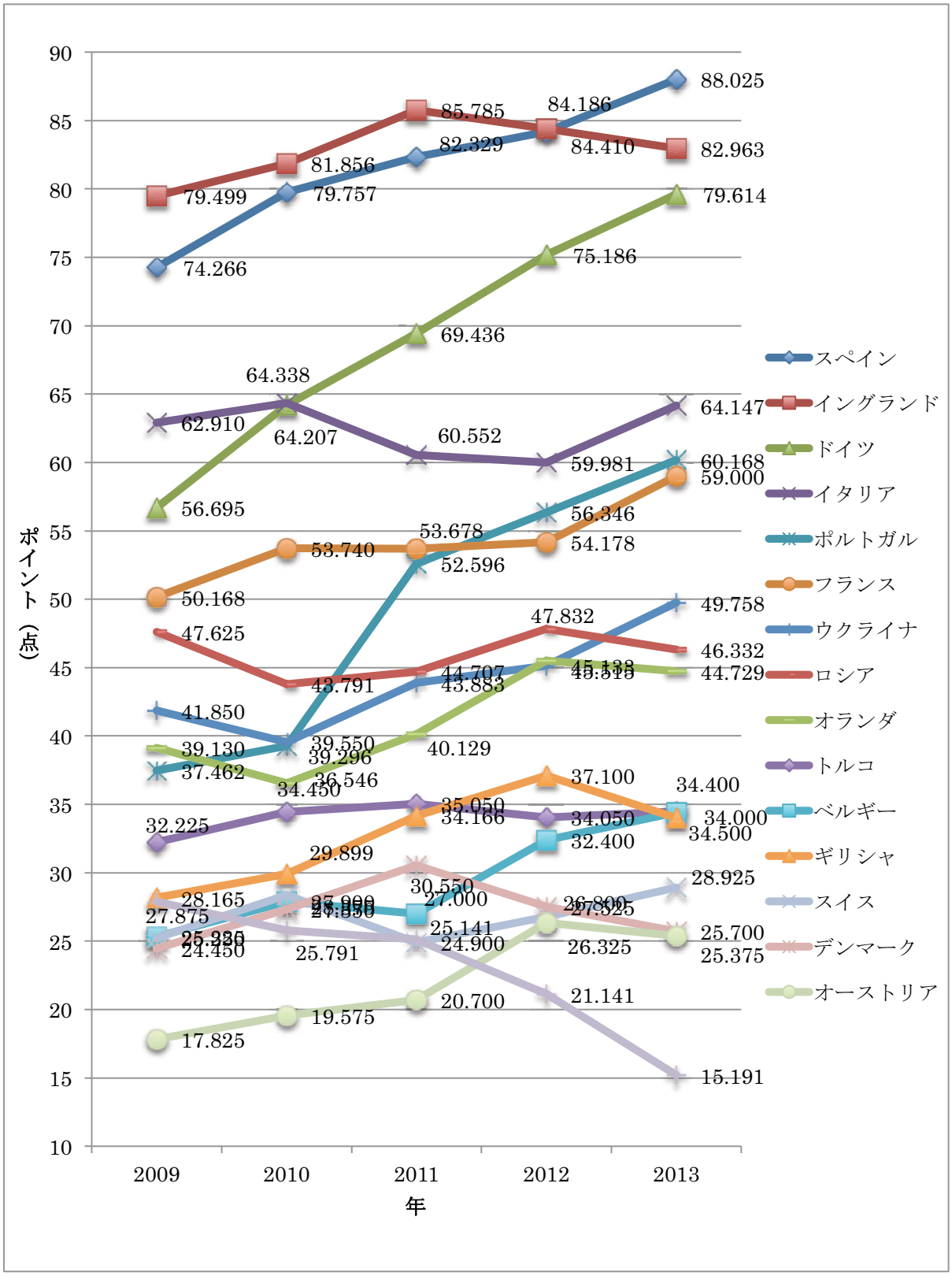

図 14　UEFA リーグランキング推移

UEFA.com より筆者作成

2009 年以降、イングランドとスペインが、他リーグを引き離した「2 強」状態を形成しており、長くイングランドが継続的に 1 位であったが、2012 シーズンにスペインが肉薄し、2013 年には、ついに逆転した。

また、近年、ドイツが年々ポイントをのばしており、2013 年は、2 位のイングランドと約 3.3 ポイント差の 3 位まで迫っている。4 位はイタリアであるが、Big5 の一つであるフランスは、2012 年にポルトガルに抜かれて 6 位となり、2013 年の順位も変わらず 6 位となっている（図 14)。

第３項　UEFA チャンピオンズリーグにおける各リーグ所属チームの成績

１）　UEFA　CL 過去 10 大会の結果

UEFA CL 過去 10 大会（2003-2004 シーズンから 2012-2013 シーズンの 10 シーズン）における上位の成績は表 21 のとおりであった。

①　ベスト４以上の成績

2003-2004 シーズンから、2012-2013 シーズンまでの 10 シーズンにおける、UEFA CL の優勝、準優勝、ベスト 4 進出チーム及び所属リーグは表 20 のとおりである。なお、所属リーグの略称は、以下のリーグを意味する。

ENG：イングランドプレミアリーグ　　ITA：イタリアセリエ A
GER：ドイツブンデスリーガ　　ESP：スペインリーガエスパニョーラ
FRA：フランスリーグアン　　PRT：ポルトガルスーペルリーガ
NED：オランダエールディビジ

表 20　UEFA チャンピオンズリーグ　ベスト 4 以上チーム

成績 / シーズン	優勝		準優勝		ベスト4			
	チーム	リーグ	チーム	リーグ	チーム	リーグ	チーム	リーグ
2003-04	ポルト	PRT	モナコ	FRA	デポルティーボ	ESP	チェルシー	ENG
2004-05	リヴァプール	ENG	AC ミラン	ITA	チェルシー	ENG	PSV	NED
2005-06	バルセロナ	ESP	アーセナル	ENG	AC ミラン	ITA	ビジャレアル	ESP
2006-07	AC ミラン	ITA	リヴァプール	ENG	マンチェスターU	ENG	チェルシー	ENG
2007-08	マンチェスターU	ENG	チェルシー	ENG	バルセロナ	ESP	リヴァプール	ENG
2008-09	バルセロナ	ESP	マンチェスターU	ENG	チェルシー	ENG	アーセナル	ENG
2009-10	インテル	ITA	バイエルン・ミュンヘン	GER	バルセロナ	ESP	リヨン	FRA
2010-11	バルセロナ	ESP	マンチェスターU	ENG	レアル・マドリード	ESP	シャルケ 04	GER
2011-12	チェルシー	ENG	バイエルン・ミュンヘン	GER	レアル・マドリード	ESP	チェルシー	ENG
2012-13	バイエルン・ミュンヘン	GER	ボルシア・ドルトムント	GER	バルセロナ	ESP	レアル・マドリード	ESP

UEFA.com より筆者作成

② ベスト 16 以上の成績

上記①に加え、グループリーグを突破し、決勝トーナメント（ベスト 16）に進出したチームの成績を、所属リーグごとに集計した結果は、表 21 及び図 15 のとおりである。

表 21　UEFA チャンピオンズリーグ　リーグ別ベスト 16 以上進出チーム数

UEFA CL	優勝	準優勝	ベスト 4	ベスト 8	ベスト 16
イングランド	3	5	8	7	11
スペイン	3		8	4	15
イタリア	2	1	1	10	13
ドイツ	1	3	1	4	10
ポルトガル	1			3	6
フランス		1	1	6	9
オランダ			1	1	2
トルコ				2	
ウクライナ				1	1
キプロス				1	
ロシア				1	3
スコットランド					4
ギリシャ					3
デンマーク					1
スイス					1
チェコ					1

UEFA.com より筆者作成

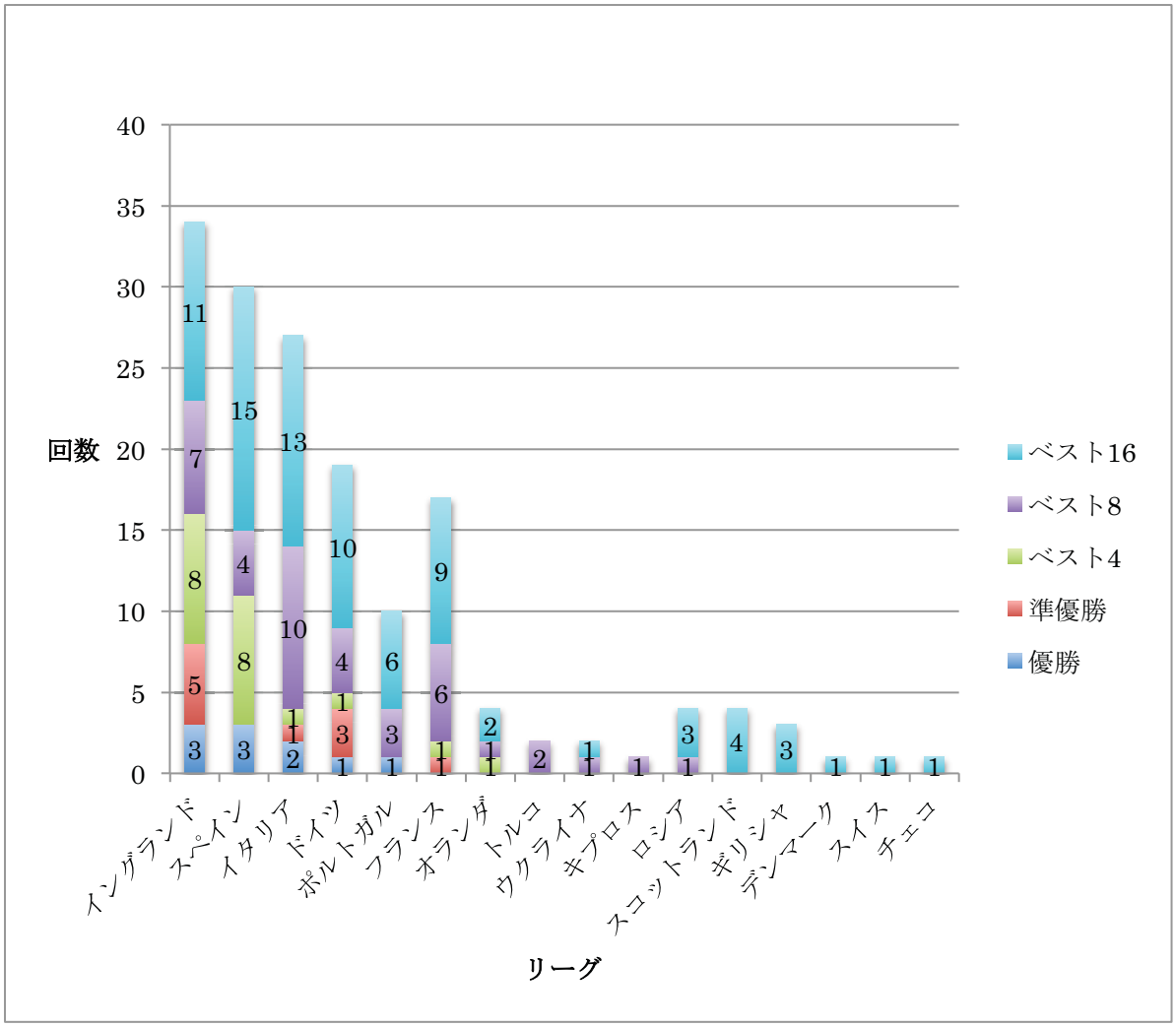

図 15　UEFA CL　出場チーム所属リーグ別成績

UEFA.com より筆者作成

③　ポイントによる評価

以上の成績を前提に、優勝 5 点、準優勝 4 点、ベスト 4 敗退 3 点、ベスト 8 敗退 2 点、ベスト 16 敗退 1 点とし、所属リーグごとの合計得点を算定した結果は表 22 のとおりであった。

表 22　UEFA CL 成績ポイントランキング

リーグ	合計点
イングランド	84
スペイン	62
イタリア	50
ドイツ	38
フランス	28
ポルトガル	17
オランダ	7
トルコ	4
ウクライナ	3
キプロス	2
ロシア	5
スコットランド	4
ギリシャ	3
デンマーク	1
スイス	1
チェコ	1

筆者作成

イングランドが 84 点を獲得し、2 位のスペインに 20 点以上の差をつけてトップとなり、UEFA CL において、イングランドのチームが、最も良好な成績を残していることがわかった。以下、スペイン、イタリア、ドイツ、フランスの順となった。

第４項　まとめ

１）所属選手に関する調査結果

以上のとおり、FIFA ワールドカップにおいては 3 大会全てで、全出場国の登録選手においてもベスト 16 進出国の登録選手においても、イングランド所属選手が最多となっており、UEFA 欧州選手権においては、過去 3 大会中 2 大会でイングランドが最多、残りの 1 大会においては自国代表が出場していないにもかかわらず、イングランドが 2 位となっており、国際大会で実績を残した国の代表になっている実力の高い選手が最も多く所属しているリーグがイングランドプレミアリーグであることがわかった。

２）所属チームに関する調査結果

選手個人として高い実力を備えた者が多数所属していたとしても、その選手がチームとして機能していなければ、チームスポーツであるサッカーのリーグとして、レベルが高いとは言えない。UEFA CL 及び UEFA EL に出場した全てのチームの成績に応じて付与されたポイントを出場国数で除して算出されたポイントに基づいてランク付けされる UEFA リーグランキングは、上位にランクされるためには、UEFA CL 及び UEFA EL に出場するチーム全てが満遍なく好成績を修める必要がある点で、当該リーグのチームとしてのレベルを測る指標となるものであるところ、イングランドは、2013 年こそ、スペインに 1 位を譲ったが、2012 年以前は、長年にわたりイングランドが 1 位の座を維持し続けていたことがわかった。

また、UEFA CL の結果に関する調査では、イングランドが 84 点と、2 位のスペイン（62 点）に 22 点の大差をつけての 1 位となっており、欧州クラブの最高峰の国際大会において所属チームが最も実績を残したリーグもイングランドプレミアリーグであることがわかった。

以上の調査から、選手個人として実力の高い選手が多数所属しているのはイングランドプレミアリーグであり、チームとしての実力の高いチームが多数所属しているのもイングランドプレミアリーグであるとの結果が出た。よって、欧州リーグの中で、最もレベルの高いリーグは、イングランドプレミアリーグであることがわかった。

第 2 節　　【研究２】移籍ルートに関する文献調査

第１節において、欧州リーグのうち、実力が高い選手が最も多く所属しているのも、実力が高いチームが最も多く所属しているのもイングランドプレミアリーグであるとの結果が出たことから、J リーグ選手が最終的に目指すべき最もレベルの高い欧州のリーグは、イングランドプレミアリーグであることがわかった。

そこで、【研究 2】においては、イングランドプレミアリーグへ我が国の選手をより多く送り込むための移籍ルートについて調査を行う。

第１項　日本からプレミアリーグへの移籍の実績

１）プレミアリーグに在籍経験のある日本人選手とその経歴

2013 年までに、イングランドプレミアリーグのチームに所属し、プレー経験のある選手は、以下の 8 名である。なお、川口能活選手も、イングランドでプレーした経験があるが、イングランドプレミアリーグではなく、2 部所属のチームであるため対象から除外した。

・稲本潤一
・西澤明訓
・戸田和幸
・中田英寿
・宮市亮
・李忠成
・香川真司
・吉田麻也

各選手の経歴は以下のとおりである。

①稲本潤一選手

生年月日	1979 年9月 18 日生
経歴	1997―2004　ガンバ大阪 →2001-2002　アーセナル（レンタル） →2002-2004　フラム FC（レンタル 2004-2006　ウエストブロミッチ →2004-2005　カーディフ（レンタル） 2006-2007　ガラタサライ（トルコ） 2007-2009　フランクフルト 2009-2010　レンヌ（フランス） 2010-　川崎フロンターレ

②西澤明訓選手

生年月日	1976 年 6 月 18 日生
経歴	1995　セレッソ大阪 1995-1995　FC フォレンダム（オランダ） 1996-2000　セレッソ大阪 2000-2001　RCD エスパニョール（スペイン） 2001-2002　ボルトン 2002-2006　セレッソ大阪 2007-2008　清水エスパルス 2009　セレッソ大阪

③戸田和幸選手

生年月日	1977 年 12 月 30 日生	
経歴	1996-2004	清水エスパルス
		→ 2003 トットナム（イングランド）
		→ 2004 ADO（オランダ）
	2005	東京ヴェルディ
	2006-2008	サンフレッチェ広島
	2008	ジェフ千葉
	2009	慶南 FC（韓国）
	2010-2011	ザスパ草津
	2012	FC 町田ゼルビア
	2013-	ウォリアーズ FC（シンガポール）

④中田英寿選手

生年月日	1977 年 1 月 22 日生	
経歴	1995-1998	ベルマーレ平塚
	1998-2000	ペルージャ（イタリア）
	2000-2001	AS ローマ（イタリア）
	2001-2004	パルマ（イタリア）
		→2004 ボローニャ（イタリア）
	2004-2006	フィオレンティーナ
		→2005-2006 ボルトン（レンタル）

⑤宮市亮選手

生年月日	1992 年 12 月 14 日生	
経歴	2011-	アーセナル（イングランド
		→2011 フェイエノールト（オランダ）（レンタル）
		→2012 ボルトン（イングランド）（レンタル）
		→2012-2013 ウィガン（イングランド）（レンタル）

⑥李忠成選手

生年月日	1977 年 12 月 19 日生
経歴	2004　FC 東京 2005-2009　柏レイソル 2009-2011　サンフレッチェ広島 2012-　サウサンプトン（イングランド） → 2013 FC 東京（レンタル）

⑦香川真司選手

生年月日	1989 年 3 月 17 日生
経歴	2006-2010　セレッソ大阪 2010-2012　ボルシア・ドルトムント（ドイツ） 2012-　マンチェスターU（イングランド）

⑧吉田麻也選手

生年月日	1988 年 8 月 24 日生
経歴	2007-2009　名古屋グランパスエイト 2010-2012　VVV フェンロ（オランダ） 2012-　サウサンプトン（イングランド）

２）日本人選手のイングランド移籍の分析

①　移籍形態

イングランドプレミアリーグに在籍した日本人選手が、プレミアリーグ加入時の移籍形態は図 16 のとおりである。

なお、稲本潤一選手は、まず、レンタル移籍によりイングランドプレミアリーグに移籍した後に、完全移籍でイングランドプレミアリーグの他のチームに移籍したため、レンタル移籍、完全移籍の双方でカウントすることとした。

完全移籍　5 名
レンタル移籍　3 名
新入団　1 名

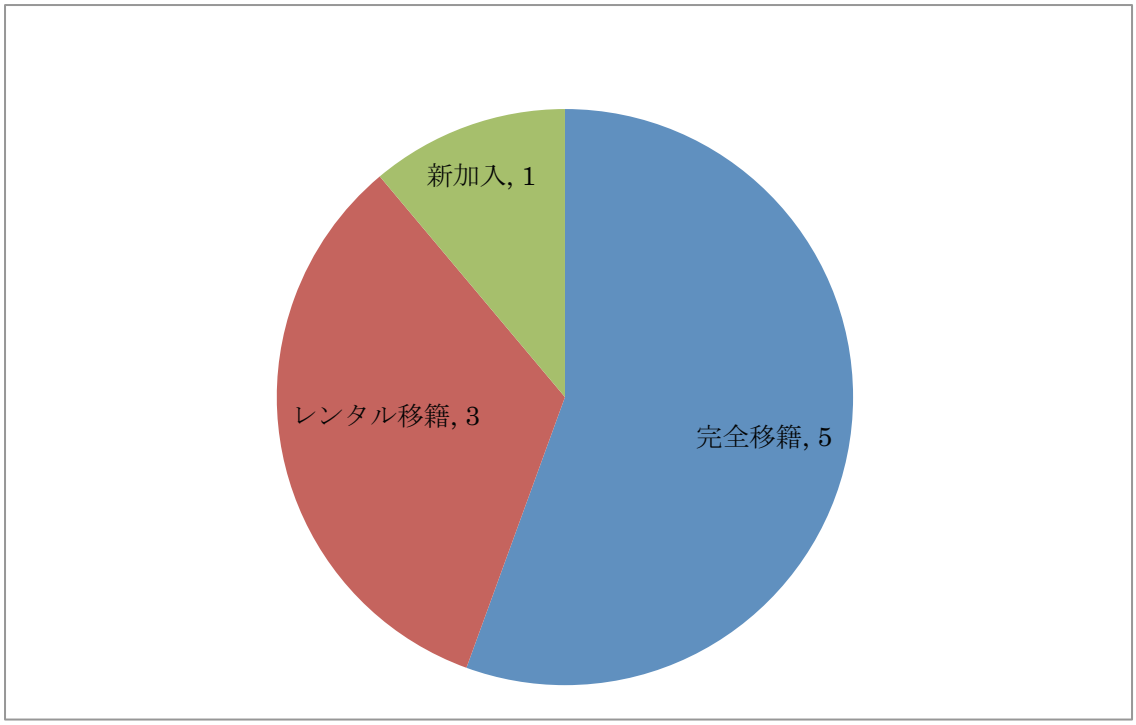

図 16　日本人選手のプレミアリーグ移籍形態

Transfermarkt.co.uk より筆者作成

イングランドプレミアリーグへの移籍の形態としては、完全移籍が最も多く（5名）、全体の 55%が完全移籍による移籍となっている。J リーグを経ずに、最初の所属チームがイングランドプレミアリーグとなった例が、宮市亮選手の 1 例存在した。

② 移籍前所属国

イングランドプレミアリーグに在籍した日本人が、同リーグに加入する直前に所属していたリーグの内訳を調査した結果は図 17 のとおりであった。

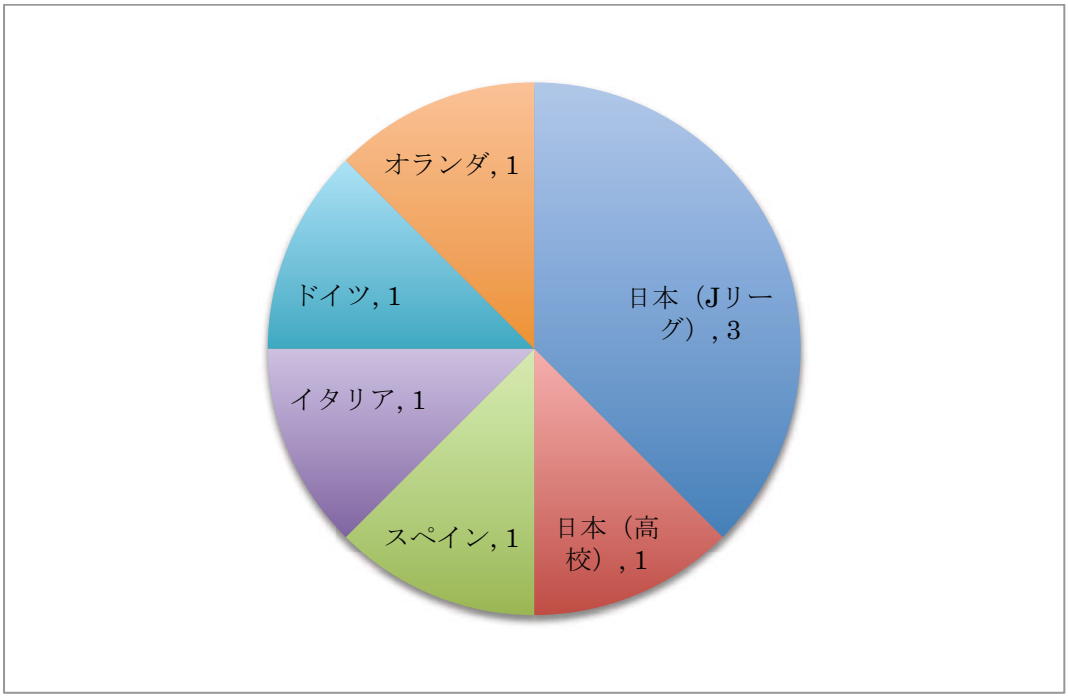

図 17　日本人選手　プレミアリーグ加入前所属リーグ

Transfermarkt.co.uk より筆者作成

人数は、日本（J リーグ）が最多（3 名）であった。しかし、高校卒業後に J リーグを経ずにプレミアに加入した宮市亮選手を加えても、日本からイングランドプレミアリーグというルートで加入した選手は 4 名と全体の半数となっており、スペイン、イタリア、ドイツ、オランダといった他の欧州リーグを経由してイングランドプレミアリーグに移籍した選手と同数であった。

③　移籍時年齢

日本人選手が、イングランドプレミアリーグに移籍した際の平均年齢を、全選手及び移籍ルート別に算出した結果は表 23 のとおりであった。

表 23　日本人選手　プレミアリーグ移籍時平均年齢

全選手平均	25.17 歳
日本から直接移籍	25.33 歳
他国リーグ経由	25 歳

Transfermarkt.co.uk より筆者作成

イングランドプレミアリーグへの移籍時の平均年齢は、日本から直接移籍するよりも、他国のリーグを経由した方が若いという結果が出た。

④　移籍金の有無

J リーグのチームを経ることなくイングランドプレミアリーグに入団した宮市亮選手を除く 7 名の選手は、いずれも、J リーグから移籍した際には、移籍金が発生していなかった。

イングランドプレミアリーグへ移籍する過程で移籍金が発生したのは、香川真司選手及び吉田麻也選手の 2 名のみであり、いずれも、同リーグへ移籍する際に、移籍金が発生した。

第２項　他の欧州リーグから、当該リーグへの移籍実例調査

2003−2004 年シーズンから、2012-2013 年シーズンまでの過去 10 シーズンにおいて、イングランドプレミアリーグへ移籍した選手が、移籍直前に所属していたリーグの内訳は表 24 及び図 18 のとおりであった。なお、ここで集計した移籍は、完全移籍のみを取り扱っており、レンタル移籍による移籍及びレンタル移籍期間満了に伴う原所属チームへの復帰は対象外とした。

表 24　プレミアリーグ移籍選手　移籍前所属リーグ

元所属 / シーズン	スコットランド	ウェールズ	フランス	スペイン	ドイツ	アイルランド	オランダ	イタリア	ポルトガル	ベルギー
2013−2014	48	34	13	31	5	6	12	20	11	6
2012−2013	75	68	34	20	16	16	14	12	12	7
2011−2012	93	60	17	30	21	16	10	16	5	5
2010−2011	66	73	22	22	10	16	12	9	7	8
2009−2010	72	46	21	21	9	26	3	9	1	8
2008−2009	73	64	19	23	17	17	13	9	3	3
2007−2008	78	35	36	17	22	11	14	13	7	4
2006−2007	77	48	26	10	10	15	16	4	11	4
2005−2006	59	45	21	24	12	11	12	15	10	6
2004−2005	57	23	18	17	12	9	14	12	13	5
2003−2004	52	16	22	9	12	2	10	10	8	4
合計	750	512	249	224	146	145	130	129	88	60

Transfermarkt.co.uk より筆者作成

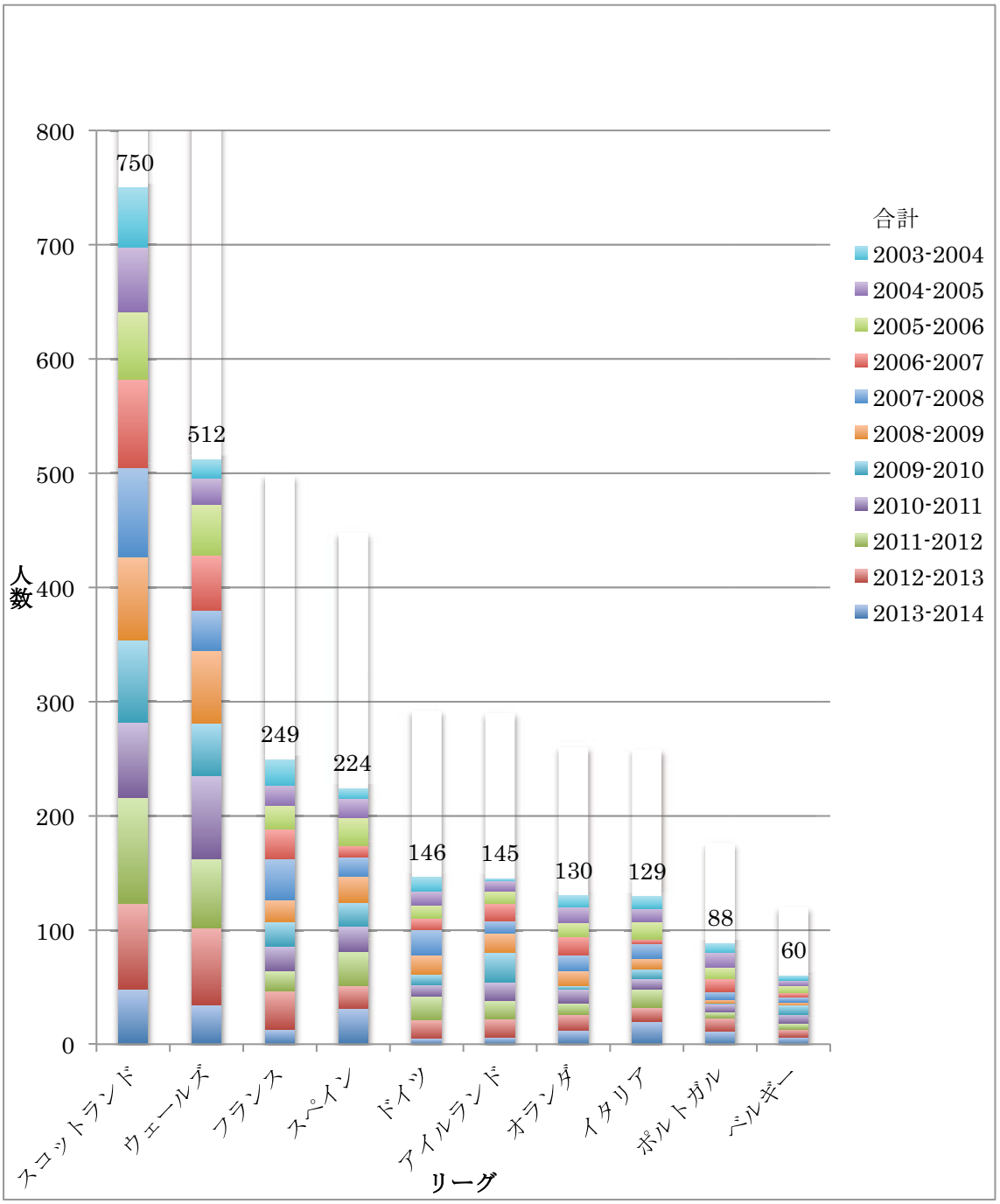

図 18　プレミアリーグ移籍選手　移籍前所属リーグ

Transfermarkd.co.uk より筆者作成

イングランドと同じ、グレートブリテン及び北部アイルランド連合王国に属するスコットランド、ウェールズのリーグからの移籍が突出して多い結果となっている。

連合王国外のリーグでは、フランス（10 年間合計で 249 名）、スペイン（同 224 名）、ドイツ（146 名）、アイルランド（145 名）、オランダ（130 名）及びイタリア（129 名）の順となっている。

第 3 項　プレミアリーグへ移籍した欧州以外の選手の移籍直前の所属リーグ

１）移籍実数の調査

前項において調査した、2003–2004 シーズンから 2012-2013 シーズンまでの 10 シーズンにおいて、イングランドプレミアリーグに移籍した選手のうち、欧州以外の国籍の選手のみを抽出して、移籍直前に所属していたリーグを調査した。その結果は、表 25 及び図 19 のとおりである。

表 25　プレミアリーグ移籍選手　移籍前所属リーグ（欧州以外国籍選手）

	スコットランド	ウェールズ	フランス	スペイン	ドイツ	アイルランド	オランダ	イタリア	ポルトガル	ベルギー
2013–2014	3	2	2	3	1	0	1	2	3	2
2012–2013	6	2	10	2	2	1	5	4	0	0
2011–2012	3	2	8	3	3	0	1	1	0	1
2010–2011	4	2	10	1	1	0	4	3	3	3
2009–2010	3	2	4	4	1	1	0	1	0	1
2008–2009	4	4	5	6	3	1	2	1	0	0
2007–2008	1	0	11	2	5	1	1	1	2	1
2006–2007	3	3	12	2	2	0	3	2	1	3
2005–2006	3	4	6	6	3	0	3	4	1	2
2004–2005	2	1	6	3	5	0	2	2	1	2
2003–2004	4	0	9	3	2	0	3	1	1	0
合計	36	22	83	35	28	4	25	22	12	15

Transfermarkd.co.uk より筆者作成

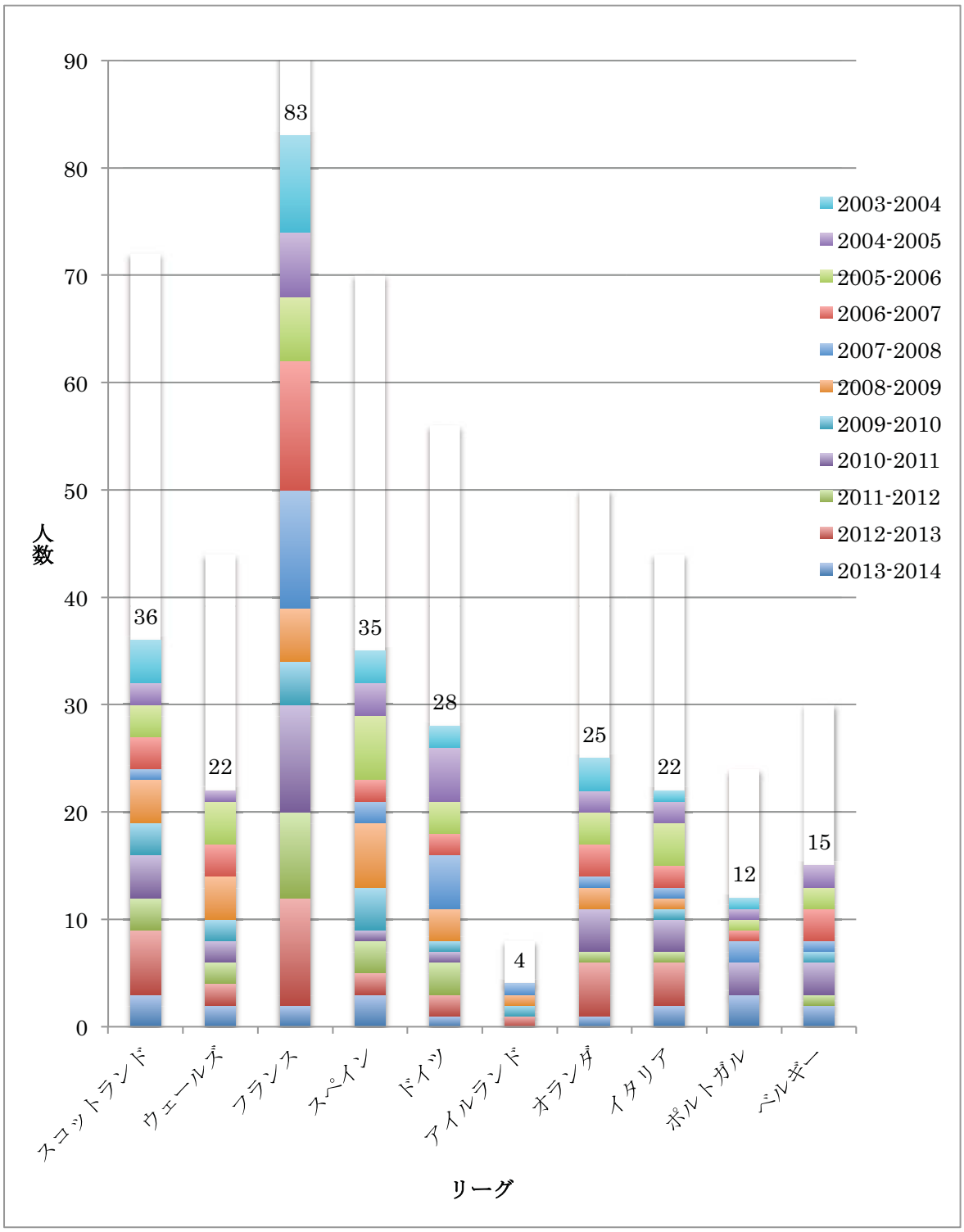

図 19　プレミアリーグ移籍選手　移籍前所属リーグ（欧州以外国籍選手）

Transfermarkd.co.uk より筆者作成

欧州以外の国籍の選手がイングランドプレミアリーグに移籍した際に、移籍前に所属していたリーグとしては、フランスが最も多い 83 名であり、次いでスコットランド（36 名）、スペイン（35 名）、ドイツ（28 名）、オランダ（25 名）、イタリア・ウェールズ（各 22 名）の順となっている。

人数からは、欧州以外の国籍の選手がイングランドプレミアリーグへ移籍する際の経由リーグとしては、フランスリーグが多いように見えるが、実際、フランスからプレミアリーグへ移籍している選手の約 9 割はアフリカ出身選手である。セネガル、コートジボワール、モロッコなど、プレミアリーグで活躍する選手の多くを輩出しているアフリカの国はフランスの旧植民地であったという歴史的背景があり、旧フランス領の国の選手は、フランスリーグアンにおいては外国人とは見なされないという特殊事情があることには留意が必要である。

２）各リーグからイングランドプレミアリーグに移籍した全選手に占める欧州以外の国籍選手が占める割合

過去 10 シーズンにおいて、イングランド以外の欧州各リーグからイングランドプレミアリーグに移籍した全選手のうち、欧州以外の国籍の選手が占める割合を計算すると、表 26 のとおりである。

表 26　欧州各リーグからプレミアリーグへの移籍選手に占める欧州以外国籍選手

移籍元国	スコットランド	ウェールズ	フランス	スペイン	ドイツ	アイルランド	オランダ	イタリア	ポルトガル	ベルギー
全移籍に占める欧州以外国籍選手の割合	4.8%	4.3%	33.3%	15.6%	19.2%	2.8%	19.2%	17.1%	13.6%	25.0%

Transfermarkt.co.uk より筆者作成

全移籍に占める欧州以外の国籍選手の割合は、フランスが最も高い（33.3%）が、上記のとおり、フランスの場合はそのほとんどがアフリカ国籍の選手であるという特殊性がある。フランスを除くと、ベルギーからイングランドプレミアリーグへの移籍が最も欧州以外の国籍の選手の割合が高く（25%）、次いで、ドイツ・オランダ（19.2%）、イタリア（17.1%）となっている。

３）プレミアリーグ移籍時の平均年齢

欧州以外の国籍の選手が、スペイン、イタリア、ドイツ、オランダの各リーグからイングランドプレミアリーグへ移籍した選手の、移籍時の平均年齢を算出した結果は、表 27 のとおりである。

表 27　プレミアリーグ移籍時平均年齢

（歳）

スペイン	イタリア	ドイツ	オランダ
27.06	26.14	25.18	24.48

Transfermarkt.co.uk より筆者作成

イングランドプレミアリーグへの移籍時の平均年齢は、スペインからの移籍が最も高く、オランダからの移籍が最も低い結果となった。スペインからイングランドプレミアリーグに移籍した選手の移籍時の平均年齢と、オランダからイングランドプレミアリーグに移籍した選手の平均年齢は、オランダから移籍した選手の方が、約 2.6 歳若いという結果となった。

また、上記各リーグからイングランドプレミアリーグに移籍した選手が、移籍前にこれらのリーグに在籍した年数の平均値を算出したところ、表 28 のような結果となった。

表 28　プレミアリーグ移籍前平均在籍年数

（年）

スペイン	イタリア	ドイツ	オランダ
4.52	4.54	3.87	3.42

Transfermarkt.co.uk より筆者作成

イタリアからイングランドプレミアリーグに移籍した選手が移籍前に在籍した期間が最も長く（4.54 年）、オランダから同リーグに移籍した選手が移籍前に在籍した期間が最も短い（3.42 年）という結果となった。

第 4 項　　各リーグの移籍金収支

2003-2004 シーズンから、2012-2013 シーズンまでの 10 シーズンにおける、スペイン、イタリア、ドイツ、フランス、オランダの各リーグ（いずれもトップリーグに限る）の移籍金収支は表 29 の表のとおりであった。

なお、本研究は、イングランドプレミアリーグに移籍するルートに関するものであることから、移籍の最終的な目的となるリーグであるイングランドプレミアリーグに関しては、調査の対象から除外した。

表 29　移籍金収支（2003-2004 シーズンから 2012-2013 シーズン）

単位 :ポンド

		2003-04	2004-05	2005-06	2006-07	2007-08	2008-09	2009-10	2010-11	2011-12	2012-13	合計
スペイン	収入	88,660,000	81,774,000	176,176,000	116,947,600	264,871,200	321,609,200	208,648,000	261,817,600	271,106,000	184,993,600	1,976,603,200
	支出	119,196,000	201,137,200	203,002,800	341,314,160	501,168,800	334,681,600	436,480,000	268,800,400	347,754,000	125,153,600	2,878,688,560
	収支	−30,536,000	−119,363,200	−26,826,800	−224,366,560	−236,297,600	−13,072,400	−227,832,000	−6,982,800	−76,648,000	59,840,000	−902,085,360
イタリア	収入	137,359,200	215,525,200	127,199,600	184,646,880	230,933,343	290,860,440	433,403,520	305,753,602	449,919,413	426,115,684	2,801,716,882
	支出	131,252,000	168,916,000	151,111,840	204,551,600	364,858,783	492,637,200	462,904,640	364,372,800	518,271,160	436,728,160	3,295,604,183
	収支	6,107,200	46,609,200	−23,912,240	−19,904,720	−133,925,440	−201,776,760	−29,501,120	−58,619,198	−68,351,747	−10,612,476	−493,887,301
ドイツ	収入	144,610,400	53,895,600	78,953,600	91,920,400	136,109,600	97,200,400	111,271,600	180,056,800	158,327,312	144,610,400	1,196,956,112
	支出	244,050,400	73,879,520	91,141,600	123,490,400	228,835,200	154,660,000	205,136,800	184,747,200	186,775,600	244,050,400	1,736,767,120
	収支	−99,440,000	−19,983,920	−12,188,000	−31,570,000	−92,725,600	−57,459,600	−93,865,200	−4,690,400	−28,448,288	−99,440,000	−539,811,008
フランス	収入	104,702,400	197,692,000	136,202,000	174,482,000	295,988,000	243,848,000	183,635,760	182,982,800	160,564,800	206,580,000	1,886,677,760
	支出	94,186,400	122,309,000	154,924,000	179,242,800	220,528,000	225,794,800	235,767,840	133,782,000	215,017,880	226,113,684	1,807,666,404
	収支	10,516,000	75,383,000	−18,722,000	−4,760,800	75,460,000	18,053,200	−52,132,080	49,200,800	−54,453,080	−19,533,684	79,011,356
オランダ	収入	51,568,000	61,982,800	67,526,800	77,664,400	147,976,400	113,044,800	69,977,600	65,296,000	107,778,000	98,025,400	860,840,200
	支出	26,576,000	25,128,400	33,413,600	53,952,800	97,244,400	79,468,400	45,742,400	34,804,000	59,166,800	41,111,400	496,608,200
	収支	24,992,000	36,854,400	34,113,200	23,711,600	50,732,000	33,576,400	24,235,200	30,492,000	48,611,200	56,914,000	364,232,000

Transfermarkt,co.uk より筆者作成

10 シーズンの合計で、最も利益が大きかったのはオランダ（364,232,000 ポンドの利益）であり、最も損失が大きかったのはスペイン（902,085,360 ポンドの損失）であった。10 シーズンの収支で利益を計上したのはフランスとオランダのみであり、他の 3 リーグはいずれも損失計上となった。また、オランダは、過去 10 シーズンのいずれのシーズン単年でも黒字を記録していたことがわかった。

第 4 章 考察

第 1 節　Ｊリーグからプレミアリーグへの直接の移籍

過去、イングランドプレミアリーグに所属した経験のある日本人選手の経歴調査の結果から、日本から直接プレミアリーグに移籍（J リーグを経ずに直接プレミアリーグのチームに入団したケースを含む）した選手の数が、他国のリーグを経由してイングランドプレミアリーグに移籍した選手数と変わらないことがわかった。移籍に限れば、むしろ、日本から直接入団した選手の方が少ない。また、イングランドプレミアリーグ移籍時の平均年齢も、日本から直接移籍するよりも、むしろ他国のリーグを経由した方が、わずかではあるが若いという結果が出ている。スポーツ選手は、年齢が若い時期の方が、その能力の伸び代が大きいことが通常であり、選手の競技力をより大きく強化するためには、できる限り若いうちによりレベルの高い環境での経験を積むことが有益であると考えられるが、この点も併せて考慮すると、日本からの直接移籍した実績の少なさ、その際の年齢から考えて、現時点では、J リーグから直接イングランドプレミアリーグへの移籍を目指すことは、効率的な戦略とは言えないと考えられる。

また、J リーグから、直接イングランドプレミアリーグへ移籍した例では、移籍金が発生した実例は存在しないことから、現時点では、依然として、イングランドプレミアリーグのチームは、J リーグチームから、日本人選手を、移籍金を払ってまで取得しようと考える状況には至っていないと考えられる。

以上からすると、現状では、J リーグからイングランドプレミアリーグへの直接の移籍では、移籍時期も遅くなってしまうため、選手の強化の点でのメリットが小さく、また、J リーグのチームにとっても、現状では、移籍金を得られる可能性が極めて低いと言わざるを得ない。よって、日本から、イングランドプレミアリーグへの直接の移籍を志向することは、現状では、選手、J リーグチームのいずれにとっても、好ましい選択肢とは考え難い。

第 2 節　他の欧州リーグ経由のプレミアリーグ移籍

そこで、他の欧州リーグを経由して、イングランドプレミアリーグへ移籍す

るルートを)検討する。

「プレミアリーグへ移籍した選手の移籍直前の所属リーグ」調査によれば、スコットランドとウェールズからイングランドプレミアリーグへ移籍した選手の数が抜けて多いという結果が出ているが、これらは、いずれもイングランドとともに連合王国（United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland）を構成する国であることから、参考にすることは適切ではない。連合王国以外の国のリーグとして上位にランクされたリーグは、フランス、スペイン、ドイツ、アイルランド、オランダ及びイタリアであるが、日本人選手の移籍ルートを考える上では、欧州以外の選手の移籍実績が重要である。なぜならば、ボスマン判決により、欧州連合（European Union）加盟国の選手は、他の加盟国において外国人とみなされないことから、移籍において障壁が少ないため、各リーグにおけるいわゆる「外国人枠」の影響を受けうる欧州以外の国籍の選手の移籍こそが、日本人選手の移籍戦略の参考となるためである。

欧州以外の国籍の選手の移籍実績調査から、イングランドプレミアリーグへ移籍した欧州以外の国籍の選手数は、フランス（83 名）、スコットランド（36 名）、スペイン（35 名）、ドイツ（28 名）、オランダ（25 名）、イタリア・ウェールズ（各 22 名）の順となったが、これを、全移籍に占める欧州以外の国籍の選手の割合で比較すると、フランス（33.3%）、ベルギー（25%）、ドイツ・オランダ（19.2%）、イタリア（17.1%）の順となる。この割合が高いということは、欧州以外の選手がイングランドプレミアリーグに移籍しやすいリーグであることを表しているとの評価が可能であると考えられるが、既述のとおり、フランスリーグからイングランドプレミアリーグに移籍した選手は、その 9 割がアフリカ人であり、フランスにおいては、旧植民地国であるアフリカの国籍を持つ選手は外国籍扱いされないことから、上記の数字をもって、直ちに日本人選手の移籍の参考にし得るとは言い難い。また、フランスリーグは、EU 加盟国及び旧フランス領のアフリカ諸国以外の国籍を持つ選手の登録は各チーム 3 人までとされていることを考えると、日本人選手が移籍しやすいリーグと言い難く、移籍ルートとしては採用し難いであろう。

欧州以外の選手の割合が高い残りの国の中から、連合王国の構成国であるウェールズを除くと、残る選択肢は、スペイン、イタリア、ドイツ、ベルギー、オランダとなる。この中で、ベルギーからイングランドプレミアリーグの移籍については、欧州以外の国籍の選手が占める割合が最も高く注目に値するが、

ベルギーリーグの所属チームは、過去 10 年の UEFA チャンピオンズリーグにおいてベスト 16 以上への進出が一度もないことから、他に比べて、リーグのレベルに疑問が残ることから、本稿では除外して考えることとする。残りのスペイン、イタリア、ドイツ、オランダの 4 か国のリーグについて、これらのリーグからイングランドプレミアリーグへ移籍した時点での選手の平均年齢はオランダが最も若く、また、移籍前のリーグ在籍期間もオランダが最も短期間である。このことから、オランダリーグでは、短期間かつ比較的若年のうちにイングランドプレミアリーグへ移籍する道が開けていると考えられる。

加えて、選手が、実力を強化するために有益なのは、何よりもより多くの試合に出場することであるが、過去、オランダリーグ（トップリーグである Eredivisie に限定）に移籍した日本人選手が、移籍した初年度の試合出場実績を見ると、過去、8 人の選手の平均で、リーグ戦のうちの 81.86%と、非常に多くの試合に出場していたという実績がある。また、2010 年、J リーグを経ずにイングランドプレミアリーグのアーセナルに入団した宮市亮選手は、その時点で、イングランドの就労ビザが取得できなかったため、すぐにオランダのフェイエノールトにレンタル移籍しているが、フェイエノールト加入後に行われたリーグ戦 13 試合中 12 試合に出場を果たしている。宮市選手は、翌シーズン以降、プレミアリーグに復帰しているが、思うような出場機会に恵まれていないことを考えると、オランダリーグにおいて、日本人選手がいかに出場機会に恵まれやすいかがより浮き彫りになる。このように、オランダリーグは、日本人選手が、出場機会に恵まれやすいリーグであると評価することが可能であり、この点で、日本人選手の移籍先として好適である。

さらに、各リーグの移籍金による収支をみると、オランダリーグの特質がより浮かび上がってきた。スペイン、イタリア、ドイツの各リーグは、過去 10 シーズンにおける移籍金の収支がいずれもマイナスであったのに比べ、オランダリーグは利益を計上している。それも、各シーズン単位でもすべて利益が出ている。このことから、オランダリーグは、選手を安く獲得し、高く移籍させていることがわかった。前述のとおり、移籍金が、選手の実力を表す一指標であると考えると、オランダリーグに所属した選手は、オランダに移籍した時点よりも実力を高めて、オランダリーグ以外へ移籍しているということがうかがえる。すなわち、オランダリーグは、欧州のリーグの中でも、選手の育成力が高いリーグであると評価することが可能であろう。

実際、近年でも、移籍金なしでオランダリーグに移籍し、後に高額の移籍金とともにイングランドプレミアリーグに移籍した例がいくつか存在する。その代表例は、ウルグアイ代表のエースストライカーであるルイス・スアレス（Luis Suárez）選手であろう。スアレス選手は、2006 年 7 月に、ウルグアイから、オランダの FC Groningen に移籍金なしで移籍した後、2007 年 8 月に同じオランダの AFC Ajax Amsterdam への移籍金 6,600,000 ポンドでの移籍を経て、2011 年 1 月に、イングランドプレミアリーグの Liverpool FC に移籍金 22,800,000 ポンドで移籍した。FC Groningen は、スアレス選手一人の移籍により、約 1 年間のうちに、6,600,000 ポンドの利益を得たことになる。また、日本人選手でも、日本代表のディフェンダー吉田麻也選手の例がある。吉田麻也選手は、2010 年 1 月、J リーグの名古屋グランパスから、オランダの VVV-Venlo に移籍金なしで移籍した後、2012 年 8 月、イングランドプレミアリーグの Southampton FC に移籍金 2,000,000 ポンドで移籍した。このような実例からも、オランダは、若い選手を安く獲得して、育てて移籍させる、という力に長けたリーグであると評価することができる。

以上より、オランダリーグは、イングランドプレミアリーグへ移籍するためのステップとするリーグとしては、欧州以外の選手のイングランドプレミアリーグへの移籍のしやすさ、移籍までに要する年数が短いためより若いうちにイングランドプレミアリーグへ移籍できるという特色があり、また、日本人選手が出場機会に恵まれやすという特色があり、また、リーグ自体の選手育成能力が高いと評価することが可能である。そして、オランダリーグは、自国籍選手枠が設定されているが、それ以外の選手の国籍が問われないため、日本人選手が移籍するに際しての障壁も小さい。以上の点から、日本人選手の最初の移籍先としては、最適であると考察される。

第 3 節　オランダ移籍が日本サッカー界にもたらす利益

以上のとおり、イングランドプレミアリーグに J リーグ選手を移籍させるためのルートとしては、オランダが最適であると考えられる。

そして、研究 2 の移籍金収支に関する研究の考察において、オランダが、選手を安く獲得し、育成して高い移籍金で移籍させることに長けたリーグであるという特徴を踏まえ、かつ、以下のような契約を締結することにより、J リーグチームのみならず、中学校、高等学校、地域のサッカークラブ等の少年育成組

織にとっても利益をもたらすことができると考えられる。

まず、背景において述べたとおり、FIFA が定める RSTP に規定されている Solidary Mechanism により、日本人選手が他のチームに移籍する際に移籍金が発生した場合には、その選手が 12 歳から 23 歳までの間に所属したチームは、移籍金の 5%を Compensation として受け取ることができる。本論文の作成時点では、J リーグ選手の移籍は、依然として選手契約期間満了後の移籍が多く、移籍金が発生しない例が多く、移籍金が発生するものであっても、金額はあまり高額とはなっていない。そのため、J リーグからの直接の移籍では、これにともなう利益を J リーグチーム等が享受することは依然として困難である。しかしながら、既述のとおり、オランダは、移籍金 0 又は低額で獲得した選手を育て、移籍金額を上昇させて他のリーグに移籍させるすべに長けていることから、まず、J リーグ選手をオランダに移籍させて、オランダリーグで成長させた上で、イングランドプレミアリーグに移籍させるようにすれば、オランダからイングランドプレミアリーグへの移籍の際の移籍金の 5%を、当該選手が所属していた J リーグチームや、高等学校以下の少年育成機関で分配することができ、これらのチームや期間による選手強化費の増加につながるという好循環を生むことができる。

また、長友佑都選手（FC 東京から、チェゼーナ（イタリア）を経て、現在、インテルミラノ（イタリア）に所属）や、乾貴士選手（セレッソ大阪から、ボーフム（ドイツ）を経て、現在、フランクフルト（ドイツ）に所属）の移籍の例のように、自チームからの移籍の際には移籍金を得られなくても、当該選手が、さらに他のチームに移籍した際に、その移籍金の一部を受け取れるようにする契約例が存在する。すなわち、長友選手の例では、チェゼーナからインテルに移籍した際に、その一部が FC 東京に支払われた。また、乾選手の例では、ボーフムからフランクフルトに移籍する際、乾選手が、フランクフルトから他のチームに移籍する際には、その移籍金の一部がボーフムに支払われるという契約となっている。このような契約条項を、J リーグチームが、選手をオランダに移籍させる際に、移籍先のチームと締結しておくことにより、Solidary Mechanism により受領できる金銭に加え、より多額の収入を得ることが可能となる。獲得した時よりも高い移籍金で他のチームへ移籍させる力に長けたオランダのチームであれば、J リーグチームからの移籍金額を抑える代わりに、上記のような契約に応じてもらえる可能性は高いであろう。

以上より、J リーグチームや、少年育成機関に、より多額の金銭をもたらすことができる可能性があるという点から、J リーグ選手をイングランドプレミアリーグへ移籍させるための最初の移籍先として、オランダを選択することは、選手のみならず、J リーグチームや少年指導機関にとってもメリットが大きい。

第 4 節　　発展の可能性

本研究は、J リーグ選手の移籍に関して調査したものであるが、この研究結果は、EU 加盟国以外の国籍の選手には等しく参考にしうるものと言える。したがって、J リーグ選手のみならず、他の欧州以外の国、特に、アジア諸国のサッカー選手の移籍戦略にもそのまま適用できる可能性があろう。

さらに、J リーグチーム側の観点から考えると、本研究結果は、例えば、アジア諸国の有望な選手を若年のうちに獲得し、それらの国よりもレベルの高い J リーグの試合に出場させることで育成してオランダに移籍させ、その際に、前節で考察したような契約条項を盛り込んだ契約を結ぶことによって、その選手が欧州でさらにステップアップした際に、移籍金の一部の分配を受けることにより利益を上げる、という戦略につなげられる可能性を示唆するものといえよう。

第 5 節　　今後の課題

本研究により、最初の海外移籍先として、リーグとしてはオランダへ移籍させることが重要であることがわかったが、さらに、いずれのチームへ移籍させることがイングランドプレミアリーグへの移籍によりつながりやすいかという点や、さらに進んで、イングランドプレミアリーグの上位のチームへ移籍を意図した際の移籍先チーム選択といった、より具体的な考察は、今後の課題である。

また、本研究において、イングランドプレミアリーグに移籍した全選手に占める欧州以外の国籍の選手の割合が最も高かったリーグはベルギーリーグであった。ベルギーは、FIFA ランキングにおいても、2013 年 10 月時点で 5 位にランクされるなど、近年、躍進を見せていることから、ベルギーリーグを最初の移籍先として選択することの可能性についても研究する価値があり、今後の課題といえる。

本研究が、J リーグ選手が海外移籍を考える際の参考となり、イングランドプ

レミアリーグへ移籍する選手を増やす事にわずかでも貢献することができれば幸いである。

第 5 章 結論

以上のとおり、欧州の中で、所属選手及び所属チームの双方ともに実力が高く、最もレベルの高いリーグはイングランドプレミアリーグであり、これが、Jリーグ選手が最終的に移籍を目指すべきリーグであることがわかった。そして、イングランドプレミアリーグに J リーグ選手を移籍させるために、最初の移籍先として選択すべきリーグは、欧州以外の国籍の選手が、短期間かつ若年のうちにイングランドプレミアリーグへ移籍がし易く、また、選手の育成力にも優れたオランダが、選手にとって最適である。また、リーグチームや、中学校、高等学校、ユースチーム等の少年育成機関にとっても、オランダを最初の移籍先として選択する移籍が、より多額の金銭をもたらすことができる可能性があるという点から、オランダを選択することは、選手のみならず、Jリーグチームや少年指導機関にとってもメリットが大きい。

日本人選手の移籍先としては、すでにドイツへの移籍数も多く、成功実績もあるが、イングランドプレミアリーグへの移籍を視野に入れた場合には、選手、チームの双方の利益の観点から、オランダを最初の海外移籍先とする戦略が重要である。

第６章 謝辞

本研究を行うにあたり、非常に多くの方々のお力添えやご協力をいただきました。ご助言いただきましたすべての方々に感謝申し上げます。

指導教官である平田竹男教授には、本稿に対する適切なご助言はもちろんのこと、研究の視点の持ち方や、物事の捉え方等細部にわたりご指導を頂き、研究活動全般について支えて頂きました。また、現実に、サッカー選手をはじめとするスポーツ選手の代理人をご紹介いただき、貴重なお話を伺う機会をいただきました。平田教授のお力添えなしには本研究が完成に至ることはできませんでした。平田教授に心より感謝申し上げ、厚く御礼致します。また、研究者としての心構えを教えて頂き、異なる視点からの示唆を頂いた副査の中村好男教授、本稿作成にあたり論文の構成等ご指導を頂きました児玉有子先生にも大変お世話になりました。副査を受けて頂いた両先生方にも深く感謝をしております。

本稿作成にあたり、スポーツ選手の代理人としての経験をご教示下さった水戸重之氏、山崎卓也氏、Michael Becker 氏、Philippe Grandjean 氏にも大変感謝をしております。皆様より伺った代理人としての視点、ご経験に基づく見解は、本稿のテーマや分析の視点の設定において、極めて需要な示唆を与えていただきました。

そして、平田研究室８期のメンバーの皆様にも大変感謝致しております。皆様のご助力なくして、本研究を完成させることはもちろん、一年間の大学院生活を乗り切ることはできなかったものと感じております。皆様と出会い、仲間となれた幸運に感謝致します。また、２年生修士の、皆様にも大変お世話になりました。スポーツ科学の研究という視点に乏しい私に、事細かにご助言をいただいたおかげで、今日の研究の完成をみることができました。深く感謝申し上げます。

お世話になりました全ての方々に、改めて感謝の意を表し、本稿の締めと致します。

参考文献

1)　桶田朋也『スポーツ選手の移籍制度と代理人』(2010)
2)　竹石勝義、浅井啓輔、栗原一郎、曽根原裕樹『FIFA 公認代理人～選手の移籍を司る人々～』(2009)
3)　FIFA “PLAYERS AGENTS REGULATIONS”
4)　FIFA “Regulations on the Status and Transfer of Players”
5)　寺阪昭信「サッカー選手の移籍から見た国際関係—ヨーロッパを中心に—」
6)　Nnamdi Madichie “Management implications of foreign players in the English Premiership League football”
7)　Daniel Edwards “6 of the Most Famous Agents in World Football and Who They Look After”
8)　Georgi Gradev “FIFA PLA YERS' AGENTS REGULA TIONS AND THE RELA TING JURISPRUDENCE OF FIFA AND THE COURT OF ARBITRATION FOR SPORT”
9)　Caylum O Neil “Is Eredivisie A Good Hunting Ground For The Premier League Clubs?”
10)　Transfermarkt.co.uk　http://www.transfermarkt.co.uk/
11)　UEFA 公式ページ　http://jp.uefa.com/
12)　サンケイスポーツ公式ページ（SANSPO.com）　http://www.sanspo.com/
13)　EURO2004　http://euro2004.fc2web.com/
14)　Robert Simmons　“mplications of the Bosman ruling for football transfer markets”
15）Patrick MacGovern “Globalization or Internationalization? Foreign Footballers in the English League, 1946-95”